

# 京都橘大学 歴史遺産調査報告 2018

南畑古墳群、二条城堀川石垣

2019年3月  
京都橘大学 文学部



## はじめに

本学の歴史遺産学科は、その前身となる文化財学科が1996(平成8)年に設置申請、同年12月に認可、1997(平成9)年4月より開設された。その後、2012年4月1日より文化財学科から歴史遺産学科へ学科名を変更した。

文化財学科を開設した当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける学びの一環として、本学では2000(平成12)年3月から開始した京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、近畿地方東北部のフィールドを中心として、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場での実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は主に、滋賀県高島市南畑古墳の現地調査、京都市二条城東側堀川石垣の整理を実施した。ここではそれらの成果を報告する。報告書を作ることもまた、学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大切な作業であり、これらの活動全体を通し、文化遺産のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

さて、2012(平成24)年に学科名を歴史遺産へと銘打ったのは、近年、世界遺産や文化的景観など、多様化する文化財とその周辺学の拡がりを省みた結果である。「人類の所産のうち、考古資料、彫刻、絵画、工芸品、歴史資料などの動産遺産と、建造物、近代化遺産、都市・文化的景観、史跡、埋蔵文化財といった土地に定着した不動産遺産、これらの2つの領域の文化遺産情報を対象として歴史遺産という認識の学びに高める」というものである。

本年度の歴史遺産調査報告書は、そのうちの考古遺産を主とする。我々がここで文化遺産に関わる作業と勉学に向かえるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。この場を借りて心から感謝申し上げます。今後とも変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願い申し上げます次第である。

2019年3月31日

京都橘大学文学部

## 例 言

1. 本書は、京都橘大学が2018年度に実施した二条城東側堀川石垣などの歴史遺産学科考古学・歴史遺産コースを主とした文化遺産の調査報告書である。
2. 本文の執筆には、第1章を一瀬和夫・中久保辰夫・畝麻由美、第2章を鈴木知怜、第3章を広瀬侑紀、第4章を奥田 尚があたった。
3. 本書の編集は、一瀬和夫・中久保辰夫・畝麻由美・鈴木知怜が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
4. 調査にあたっては、城戸重臣、白井忠雄、高島市シルバー人材センター、千代田化工建設株式会社、松田邦幸、宮崎雅充、大塚共有山護持会、奥田 尚、奥村弥恵、森岡秀人、馬瀬智光、新田和央、西森正晃、黒須亜希子、平井信夫、岩村義憲、中川亀造、武内良一、久保 孝、青地一郎、永井太一郎、福家恭、竹村亮仁をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

# 目 次

はじめに・例言

目次

第1章	2018年度の文化遺産調査概要と経過	1
第2章	二条城東側堀川石垣の調査（その2）	3
第3章	二条城東側堀川石垣の矢穴の形状と石垣の構造	23
第4章	二条城東側の堀川沿いの石垣材の考察	30

## 図・表目次

図1	二条城東側堀川石垣調査位置	3	図18	二条城東側堀川石垣S区（4）	20
図2	二条城東側堀川石垣調査位置詳細	3	図19	N区石垣の時期区分	25
図3	二条城東側堀川石垣調査区設定図	4	図20	C区石垣の時期区分	26
図4	二条城東側堀川石垣C区（1）	6	図21	S区石垣の時期区分	27
図5	二条城東側堀川石垣C区（2）	7	図22	二条城東側堀川石垣北（N）区の石種と 矢穴跡の時期と刻印	35
図6	二条城東側堀川石垣C区（3）	8	図23	二条城東側堀川石垣中央（C）区の石種と 矢穴跡の時期と刻印	36
図7	二条城東側堀川石垣C区（4）	9	図24	石材の採石推定地	37
図8	二条城東側堀川石垣C区（5）	10	図25	堀川石垣の刻印と石材の形状の関係	37
図9	二条城東側堀川石垣C区（6）	11	表1	二条城東側堀川西面石垣N区の石垣材の石種と 形状	24
図10	二条城東側堀川石垣C区（7）	12	表2	堀川西面石垣北（N）区の石垣材の石種と 形状	33
図11	二条城東側堀川石垣C区（8）	13	表3	堀川西面石垣中央（C）区の石垣材の石種と 形状	34
図12	二条城東側堀川石垣C区（9）	14			
図13	二条城東側堀川石垣C区（10）	15			
図14	二条城東側堀川石垣C区（11）	16			
図15	二条城東側堀川石垣S区（1）	17			
図16	二条城東側堀川石垣S区（2）	18			
図17	二条城東側堀川石垣S区（3）	19			

## 第1章

# 2018年度の文化遺産調査 概要と経過

### 1. 2018年度の調査状況

今年度の考古遺産の現地調査作業については、滋賀県高島市教育委員会の協力のもと、南畑古墳の調査を実施した。現地調査は夏期を中心とし、秋期および冬期に遺物の整理作業を実施した。

また、昨年度に引き続き京都市中京区二条城東側堀川石垣の資料整理を行った。

本書の全体の整理作業にあたっては、歴史遺産学実習の授業を中心に行った。

今年度に主として実施した調査の概要は以下に紹介する通りである。

### 2. 南畑古墳の調査

滋賀県湖西地域に所在する高島市域では、安曇川流域を中心に、数多くの古墳が築造された。6世紀前葉の有力首長墳である鴨稻荷山古墳（前方後円／45m）を代表として、安曇川南岸丘陵上に展開する田中古墳群、北岸の熊野本古墳群等が知られているが、当地域の首長系譜分析は十分ではない。そこで本年は、湖西地域における古墳築造の実態を把握するために、南畑・下平古墳群の調査に着手した。

南畑・下平古墳群の発見は昭和30年代の果樹園造成時にさかのぼり、1980年に23基の古墳が確認されている。2017年には高島市教育委員会によって開発に伴う発掘調

査がなされ、南畑古墳群では2基の横穴石室墳を含む10基以上の埋葬施設が新規検出され、下平古墳群においても新たに古墳が発見される等、あらためて実態把握が必要となっていた。今年度、調査を行った南畑古墳は、その存在は知られていたが、墳丘規模や形態等の基本的な情報が不足していた。

調査地は高島市新旭町安井川字南畑1609番地ほかであり、その測量調査日程は2018年8月27日～9月10日であった。

調査の目的は墳丘規模・形態の解明、築造時期の検討である。

測量調査は、古墳を中心とした30m×50mの範囲で実施した。まずトータルステーションにより基準杭を設け、平板を用いて25cmの等高線間隔で墳丘測量図を作成した。9月6日には、(株)文化財サービスに依頼し、写真測量とレーザー測量を行い、以上3種の手法を用いて墳丘図を作成し、本墳の規模や形態を検討した。

調査の結果、南畑古墳は墳長12.5m、高さ2mを測る円墳であり、詳細は発掘調査が必要となるが、墳丘東に造出し状を呈する部分が認められる。周濠と考えられる窪みも観察できるために、残存状況は良好と推測できる。

また表面調査の結果、墳頂や墳丘斜面から須恵器小片、周濠から埴輪片等が表採できたが、墳丘の残存状況が良好であることに比して、出土遺物の散布は少なく、遺物の多くは埋蔵されている可能性がある。築造年代は、遺物の特徴等から5世紀後半と推定できる。

以上の調査を経て、実態が不鮮明であった南畑古墳に関する基礎的な情報を得ることができた。整理作業の成果も含めて、来年度、詳細を報告する予定である。

調査および整理作業参加者は以下の通りである。



写真1 南畑古墳 調査風景



写真2 南畑古墳 調査参加者



浅野 豊、荒木紳吾、伊藤 光、岩崎孝次、岡田一矢、菅野愛香里、小島辰哉、佐々木彩人、佐々木祐士郎、佐野遥奈、庄司光一、新谷嘉海、畝麻由美、寺田善照、中川泰志、長澤知真、中谷俊哉、西浦千賀、松本弥和、山中 凌、山本美喜（以上、京都橋大学）、飯塚信幸、岩崎郁実（以上、大阪大学）。

### 3. 二条城東側堀川石垣

京都市には聚楽第・伏見・二条・淀城といった中世末～近世前期石垣城郭がある。近年では、京都市内の頻繁な発掘調査などでその様子が詳細に判明しつつある。伏見区伏見城の石垣石材は廃城の後、二条城や淀城にも再利用が認められるところである。中京区二条東側の堀川護岸にも矢穴・刻印をもつ石材がある。これらの石垣石

材の中には石切のための矢穴を残す石材、刻印の入った石材もあり、山科大塚・小山石切丁場との関連も考えられる。

2016～2017年にかけて、堀川の西岸石垣のうち、夷川通の北側から二条通までの約160mの範囲で石垣の実測と、矢穴・刻印の記録を行った。これまでに、『京都橋大学 歴史遺産調査報告 2016』で石垣材と刻印について、『京都橋大学 歴史遺産調査報告 2017』でN区の石垣についての報告を行った。

本報告のために、C・S区の石垣についての整理作業を2019年2月28日まで行った。

整理作業参加者は、奥村弥恵、広瀬侑紀、鈴木知怜、畝麻由美である。



写真3 二条城東側堀川石垣



写真4 二条城東側堀川石垣刻印石の解説板（2009年設置）

## 第2章

# 二条城東側堀川石垣の調査 (その2)

### 1. 調査の経緯と経過

本学では、2015（平成27）年から山科大塚・小山石切丁場の調査活動を実施した。それにあわせて同石切場から運ばれた石材が確認できる伏見城、御香宮神社境内の刻印石などの調査を行ってきた（垣内2017）。調査を実施した二条城堀川については、伏見城の破却、廃城に伴って多くの石材を二条城へ搬入、転用を想定し（福家2017）、2016年から石垣の現状実測と、刻印・矢穴の形状の記録を行った。2017年からは、2016年までに実施した調査で得た資料をもとに二条城東側堀川石垣や石垣に残る矢穴や刻印などの調査報告を行った。

二条城堀川の西側護岸には竹屋通から、押小路にかけての約230m間に矢穴や刻印が残る石垣がある。これは、平安京造営時に運河として改削された堀川を1602～1603

（慶長7～8）年の二条城普請に伴い、外堀として改修されたものとされる。

現在の二条城は織田信長が室町幕府の15代將軍足利義昭の御所（武家御城）として1569（永祿12）年に普請され、1573（元龜4）年に織田信長と対立し足利義昭が追放されたことにより破却された旧二条城とは異なる城郭である。旧二条城は現在の二条城の北東、京都御苑の西側、堀川の東岸に位置していた。確認されている旧二条城の遺構は1974～1981（昭和49～56）年にかけての発掘調査で検出された外堀、内堀と比定される大規模な溝と、それに伴う石仏などの転用石を利用した石垣である。フロイスによる1569年の『日本史』では、城の範囲は3街分であり、石材に石塔、石仏を用いていたことや、15000～25000人が建設作業にあてられ、70日で完成したことなどが記録されている。

現在の二条城は京都市中京区二条通堀川に位置する近世城郭である。関ヶ原の合戦で勝利した徳川家康が1600（慶長5）年に將軍宣下を受けるにあたって築城させた城館となる。1601（慶長6）年にかつての聚楽第の南側に面した地域に住まう町人などの立ち退きをおこない、翌1602（慶長7）年から本格的に造営が開始された。このとき、家康による造営では、現在の二条城の東側部分を1重の堀で囲った3層の天守をもつ単郭の方形居館であったことが「舟木本洛中洛外図屏風」の描写から分かる。また、この当時居館については、『徳川実紀』の1603（慶長8）年3月の中に「○廿一日伏見城よりご入場ありて。二條の新御所に入らせ給ふ。（去年聚樂の御館を二條に引遷さる。これを二條の新御所又は新屋敷と稱す。いまの二條城なり。）」との記載から聚楽第の一部を移設したものと考えられる。

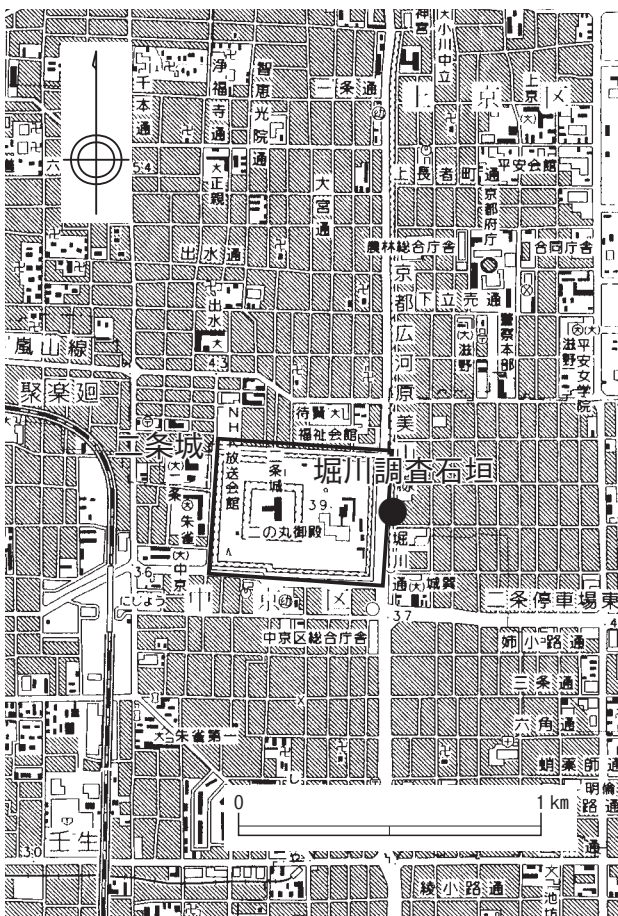


図1 二条城東側堀川石垣調査位置

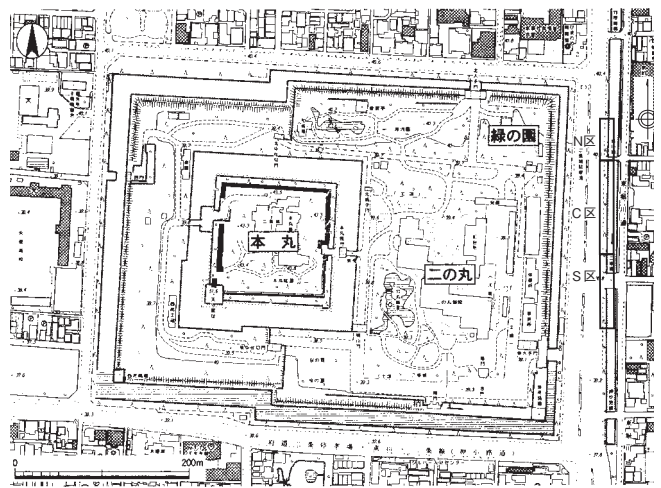


図2 二条城東側堀川石垣調査位置詳細  
(京都市埋文2010より加筆)



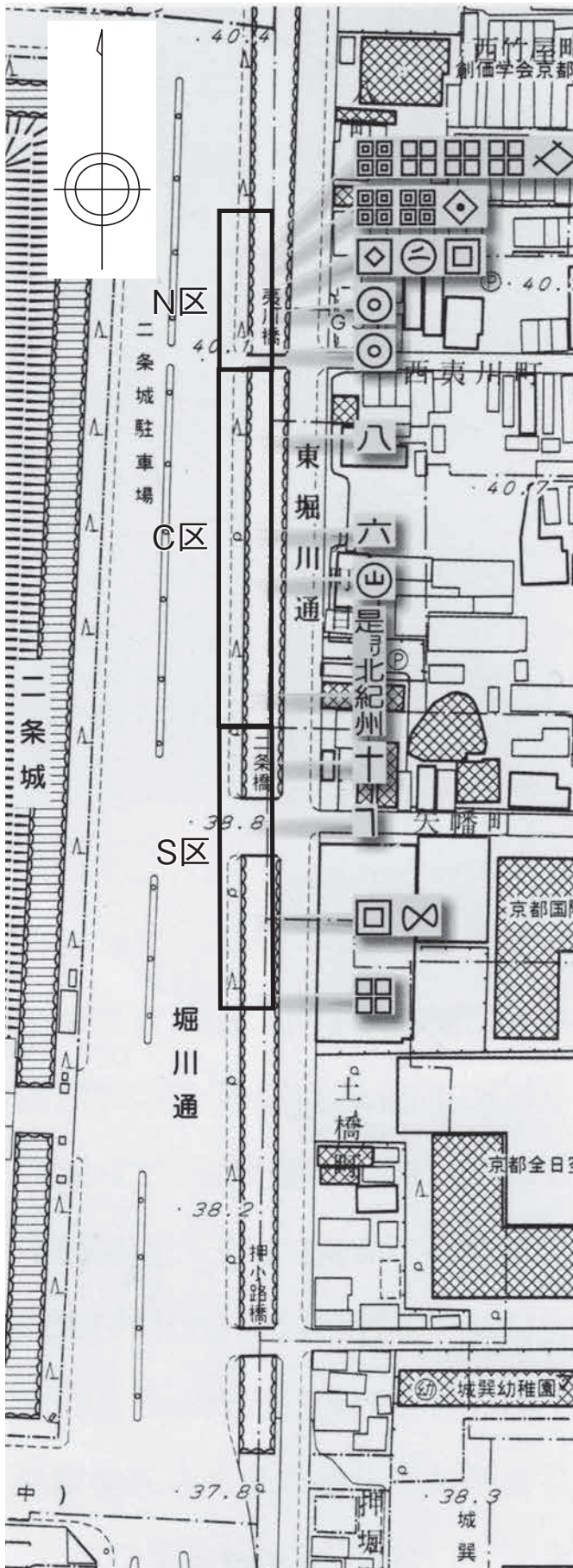


図3 二条城東側堀川石垣調査区設定図(京都市2010より加筆)

1614(慶長19)年の慶長冬の陣・夏の陣では、徳川家康・秀忠の本陣となり、1619(元和5)年に御座所・大広間・二の間を増築するなど、たびたび改修がなされている。1624(元和9)年の伏見城廃城後は洛中における幕府の拠点となった後、災害等で損傷を受け、1685(貞享元)年に北外側の損傷のあった石垣の積みなおしが行なわれ、1750(寛延3)年の落雷で天守閣が焼失し、その後再建されなかった。

明治時代に入り、宮内庁の管轄となってからは1893(明治26)年より、御所から旧桂離宮御殿を本丸に移築するなど、城内の改修が行われ現在に近い景観となった。

二条城の東側を画する堀川は794(延暦13)年から平安京造営期に開削され、運河として洛中への資材運搬の役割をになった賀茂川から分水する人工河川である。また、平安時代では朱雀大路を中心に西堀川(紙屋川)と対をなす東堀川を正式名称としていた。

堀川の周囲は堀川院、冷泉院、高陽院といった貴族の邸宅があり、庭園内の水源としても利用されていた。下流の農耕地では農業用水として、江戸時代から昭和初期ごろまで友禅染の洗浄などにも利用されていた。

豊臣秀吉の天正地割による京都中心部の都市改造の際には、鴨川の他に八尺池などの新たな水源が開削され、大徳寺の堀を経由して堀川に合流するように整備された。

二条城が築城された際に堀川は外堀としての機能を持ったため、二条城に面した区間に諸大名によって運ばれた石材で石垣が設けられた。

近代では、大正時代に入ると琵琶湖疎水の建設、それに伴う道路拡張や市電の配置などが行われ都市化すると陸運が主流となり、堀川と紙屋川以外の運河は暗渠化された。堀川も水源を鴨川から琵琶湖第二疎水に変え、1940年から実施された市内の浸水対策の工事によって流路の整備が行われ、1963年の第二疎水分線の廃止によって、一部暗渠やコンクリート張りの下水路の役割を持つ河川となった。開渠となっている区間は、上京区堀川今出川通から御池通付近までと、伏見区に位置する近鉄京都線上烏羽駅付近から鴨川合流地点までの2箇所である。その後、1997~2008年にかけて行われた堀川水辺環境整備事業によって改修工事が実施され、現在の風景となっ



た。

二条城築城時に積まれた石垣は堀川の西岸にあたり、現存している区間は「堀川に架かる夷川橋の北から二条橋の南」である。この区間には上記の2本の橋が架けられており、二条橋は土橋であったものを寛永年間に石橋として架けなおされている。

近世初期の堀川は、賀茂川から直接分水していたほかに、同じく賀茂川から分水する小川が戻橋付近で合流し、二条付近で西洞院川に分流するまでの区間は、それに伴った水量を持っていたと推測される(片平2017)。豊臣秀吉が1591(天正19)年の御土居築成後は、御土居の周囲の堀に接続し、西洞院川に分水し洛外に抜け、賀茂川と合流していたとされる。ここから、二条城築城に際し、伏見城などから資材を調達する上で、まず宇治川から西洞院川を経由し、堀川へ入る経路がある。また、宇治川に合流することにより、淀川を経て大坂からの物資等の運搬がより活発にできたと考えられる。

2009年、河川護岸の改修に伴って刻印石の解説板が設置された。

## 2. 調査区の設定

調査は、堀川の西岸石垣のうち、刻印の多く残る夷川通の北側から二条通までの約160mの範囲で実施した。調査にあたっては、夷川橋の北側をN区、夷川橋から「是ヨリ北(御)紀州」刻印(京都市2010)までをC区、「是ヨリ北(御)紀州」刻印の南側から二条橋までをS区として3地区を設定し、それぞれの地区内を遊歩道の舗装単位であった5m前後で区分けを行った。そのため、調査区は北からN1~8区、C1~21区、S1~15区とした。かつて、この調査範囲よりさらに南にも刻印がみとめられたが<sup>(1)</sup>、上記の地区以南での刻印を調査実施期間中に確認することができなかった。そのため今回の調査では調査範囲をS15区までとした。

石垣の実測は小区分け単位で実施し、大地区割りごとに図面を合成した。N区の石垣の報告は、「二条城東側堀川石垣の調査 その1」<sup>(2)</sup>とともに刻印・矢穴については「二条城堀川沿いの石垣材について(予報)」(奥田尚)<sup>(3)</sup>で行った。今度は、それら調査区のうち、C区とS区の石垣について報告する。ただし、S区は、刻印や特徴的な矢穴が残る小地区に限定して図化したものである。

## 3. 石垣の状況

現在、C区には5個の刻印が確認でき、C4区にC①「連結の丸」の刻印(図5)、C5区にはC②「八」の刻印(図6)、C10区にはC③「六または大」の刻印(図8)、C12区にはC④「丸に山」の刻印(図9)がある。C21区にはC⑤「是ヨリ北(御)紀州」<sup>(4)</sup>の銘がある(図14)。S区では5個の刻印が確認でき、S3区にはS①「十」の刻印(図16)、S8区にはS②「鋸形」の刻印(図17)、S12区にはS③b「二重四角形」の刻印とS③a「分銅形」の刻印(図18)、S15区にはS④「平四つ目結」の刻印(図18)がある。刻印はそれぞれの石材の調達を担当した大名の印とされ、特に「平四つ目結」刻印は京都市山科大塚・小山石切丁場にみられる残石に残されたものと類似する。

矢穴は、C区の全域にわたって江戸時代中期以降の小形のものも見られるが、それは全体の2割程度である。S区の現在実測が終了している区域に関しては、S2区、S5区に江戸時代中期以降の小形ものが見られる。全体としては、矢穴では山科大塚・小山石切丁場で分類したところの山科I型、山科III型が見られる(広瀬2018a)。昨年報告したN区についても、N1区で江戸時代中期以降の小形ものが見られたが、そのほかは矢穴の横断面が逆台形を呈し、矢口や矢底までの深さが10cm程度であることから、織豊期から近世初期のものであり(広瀬2018b)、C区、N区の状況もこれと同様である。N区から南側に向けて、N区より新しい江戸時代中期以降の矢穴痕が多くみられる傾向にある。

石垣の構造は、基本的に3段に積み上げて構築し、水平方向の目地が通る部分と、小形の切石で積まれた部分、現在の橋梁や土管暗渠付近の新しく積みなおされた部分がある。C区では、C2区と3区の間、C8区の南端部、C16区の北端部で石積の連続性が一度途切れているのが確認できる。また、C1区南端~2区の中央部、C3区の北半、C4区の南半、C7区の中央部、C9区の北端部、C12区の北半、C13区の北半、C17区全域では、上段は170~110cmの大型の規格石材が大半であるが、中段は整形された160~50cm大の石と30cm以下の石材が多く使われており、周囲の状況に応じて不規則に積み重ねられている部分の確認できるほか、C19区の北半では、石材の面が不揃いとなっている。一方で、C14~15区や、「是ヨリ北(御)紀州」刻印付近のC20~21区では石垣の残りがよく、比較的大きな石材を布積みした状況がみ



图4 二条城東側堀川石垣C区(1)

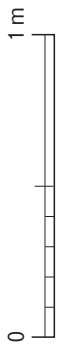


図5 二条城東側堀川石垣C区(2)



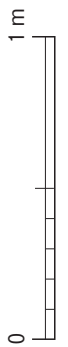
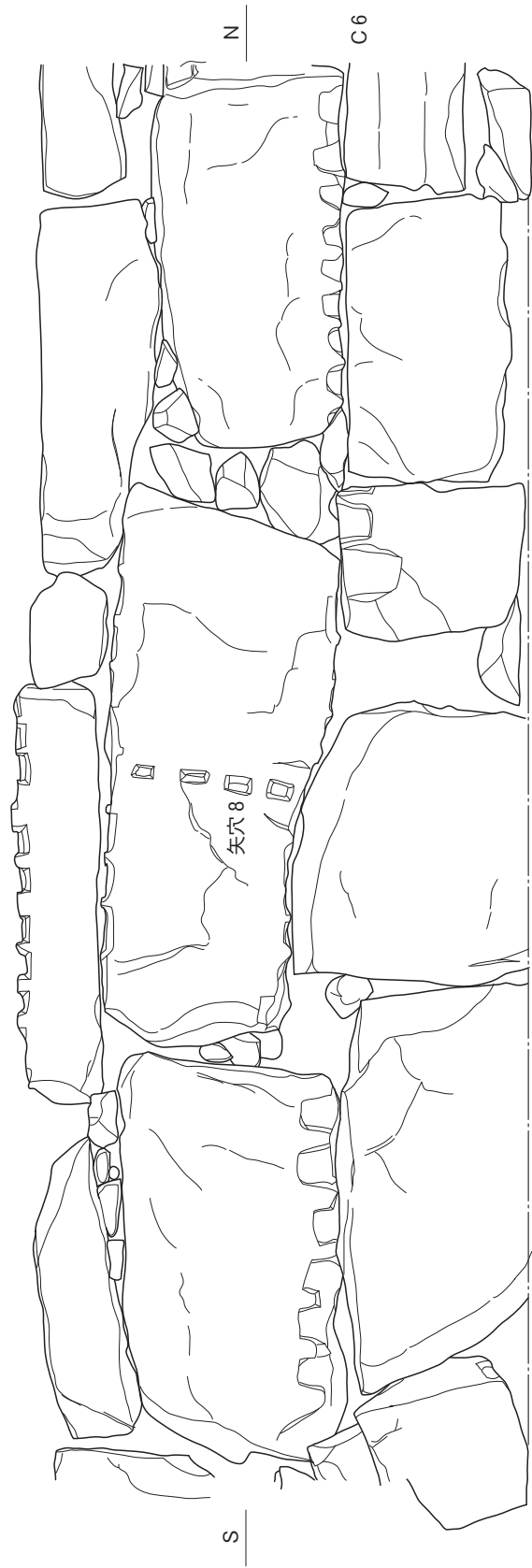
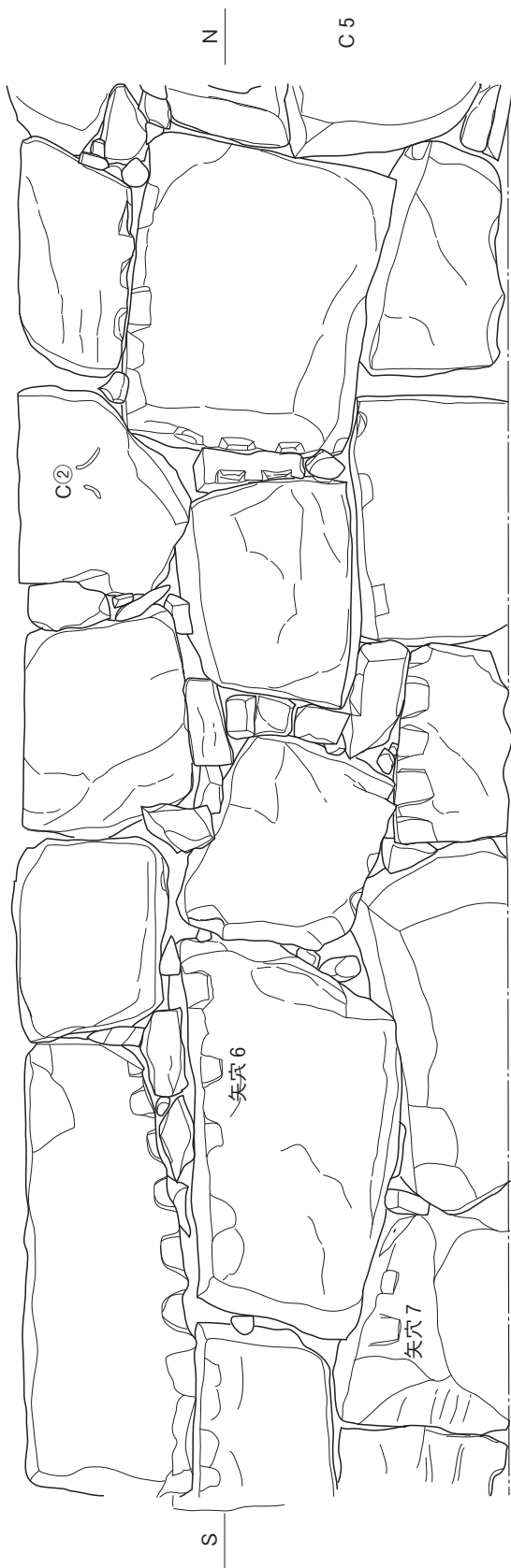


图6 二条城東側堀川石垣C区(3)

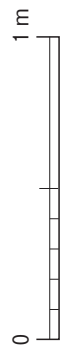


図7 二条城東側堀川石垣C区(4)



图8 二条城東側堀川石垣C区(5)



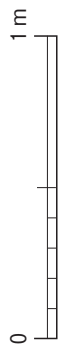


図9 二条城東側堀川石垣C区(6)

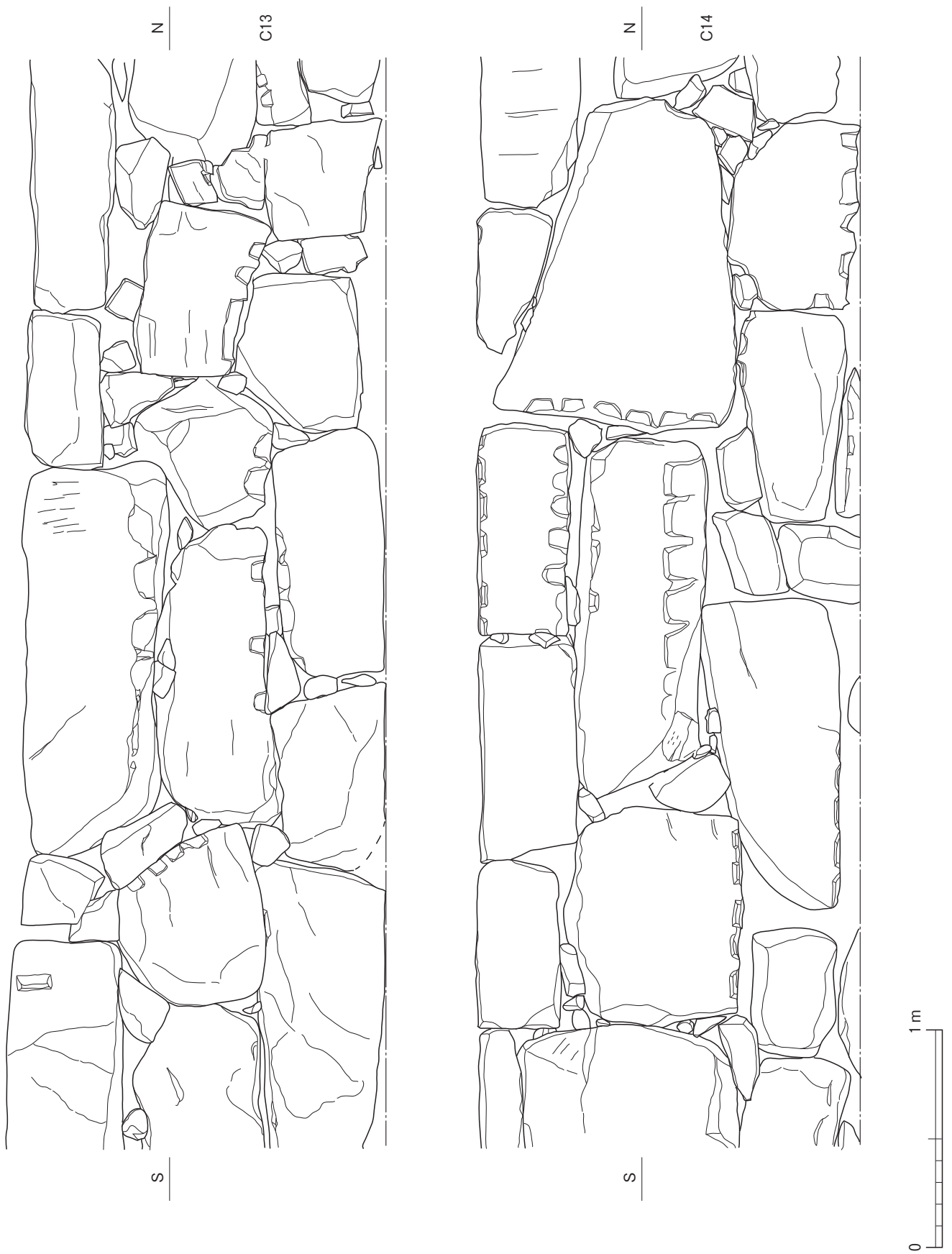


图10 二条城東側堀川石垣C区(7)

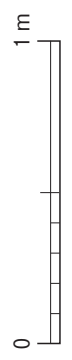
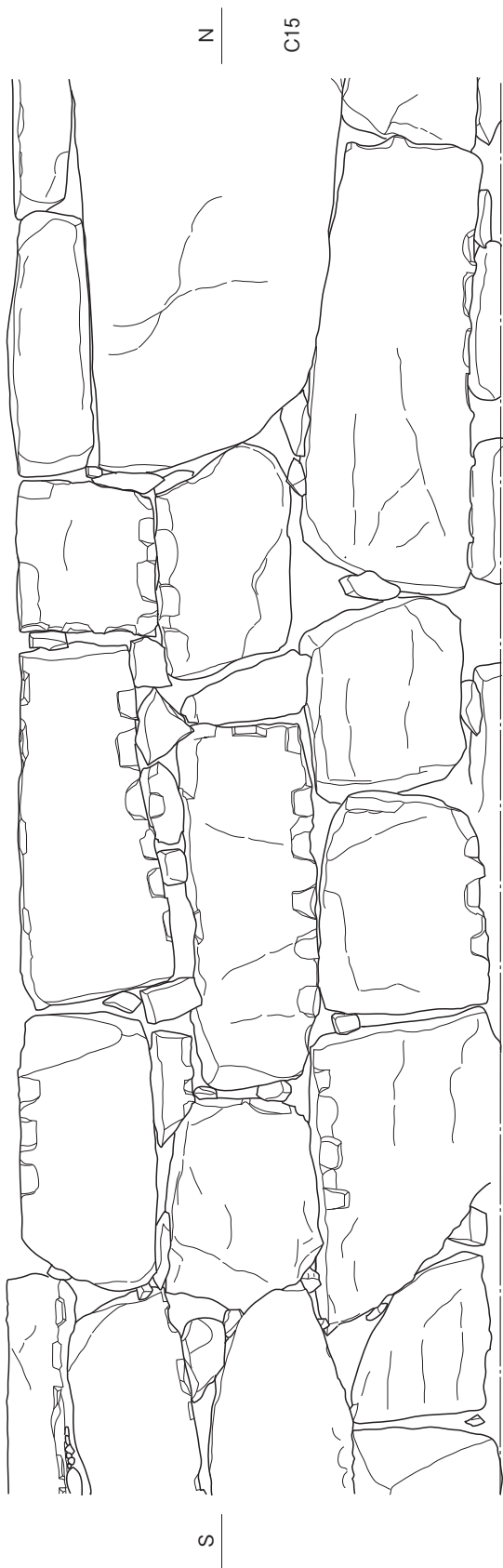


図11 二条城東側堀川石垣C区(8)



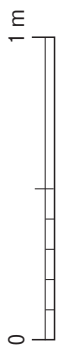
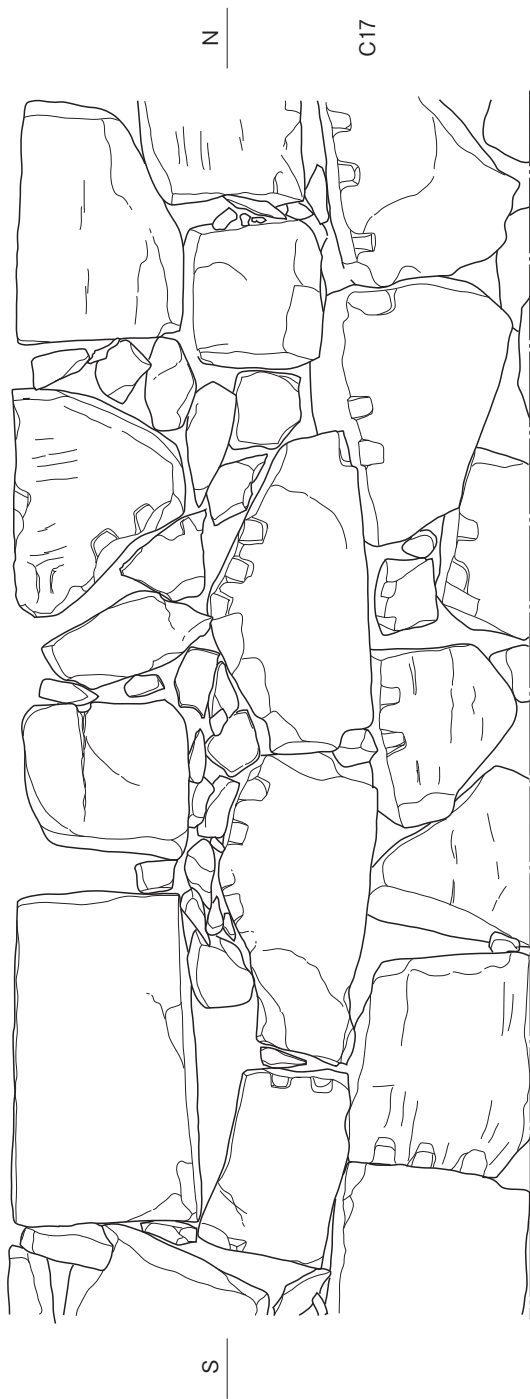


図12 二条城東側堀川石垣C区(9)

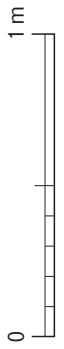
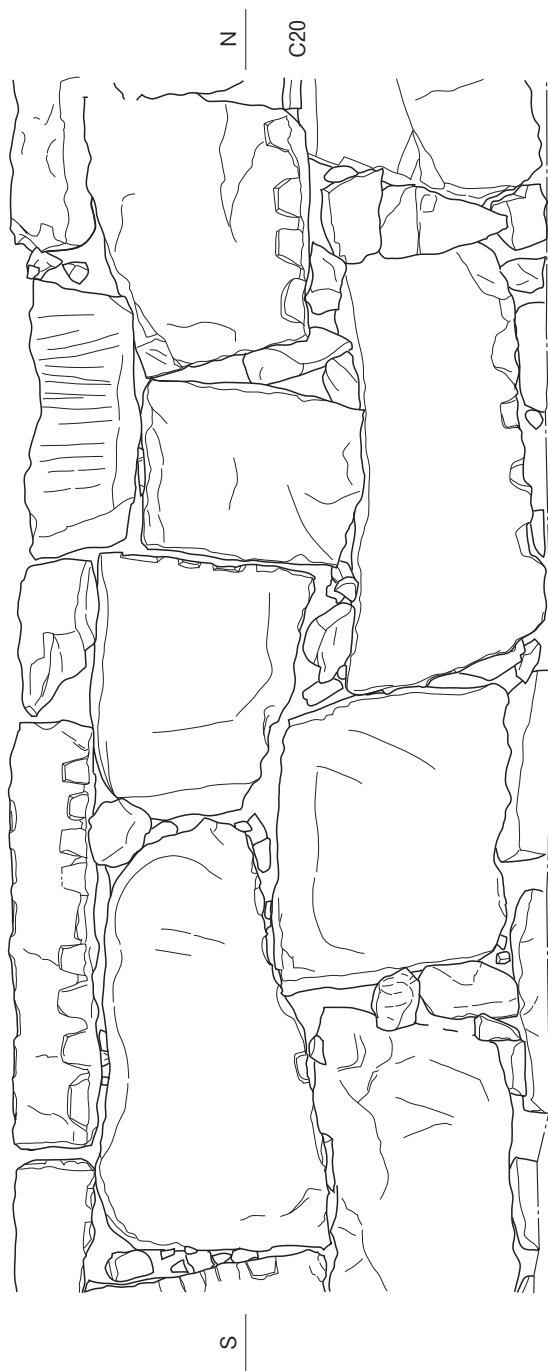


図13 二条城東側堀川石垣C区 (10)

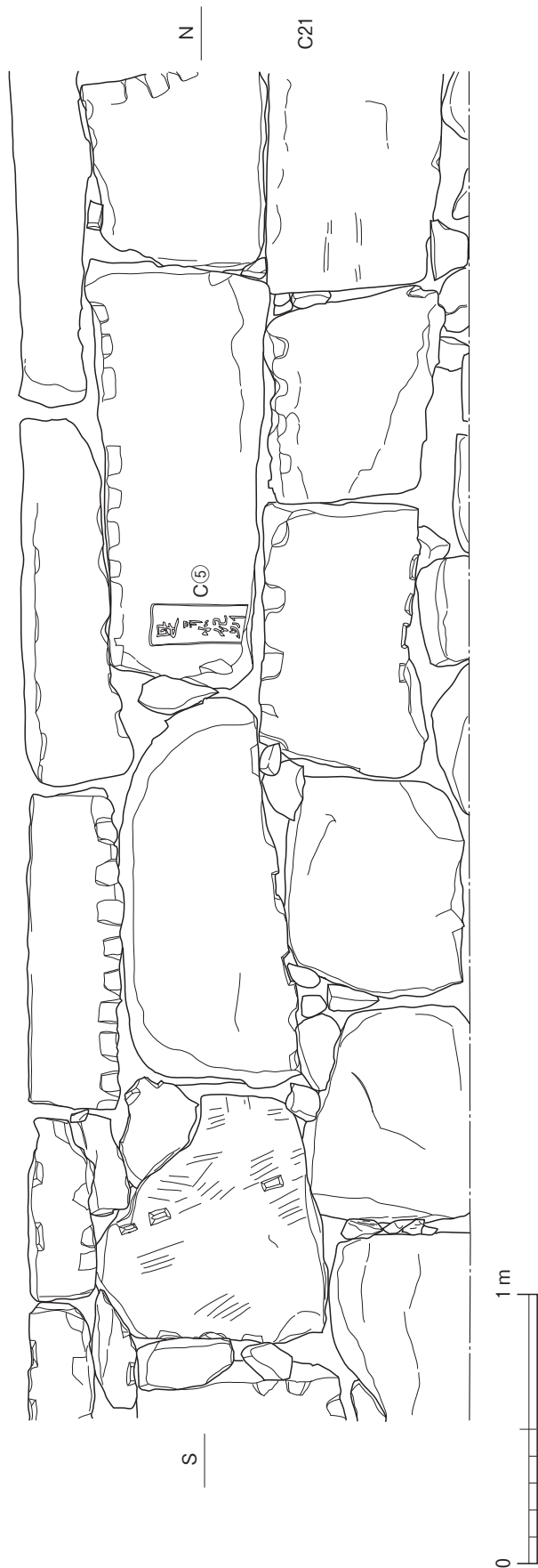


図14 二条城東側堀川石垣C区 (11)

られる。また、C1区とC11区の北端部C19区の中央の3箇所に土管暗渠があり、その付近では石積みが見られ隙間にはモルタルが充填されている箇所も見られる。

S区において、基本構造は3段に石材が積み上げられるが、上段の石材が不揃いであり、目地のそろっていない部分が散見される。170×50cm程の規格石材も見受けられるが、石材は比較的小さく方形に近いものが多く、100×80cm以下である。S4～5区中央では、上段から下段全てにおいて切り石が地面に対して水平に積まれず、周囲の石材に合わせた積み方をしており、目地が比較的そろっているのは、S2～3区中央部までの区間である。刻印、矢穴ともに希薄となる。

堀川の構造は洛中洛外図などによると、二条城が築城された慶長期から存在するようである。しかし、所々には近代以降の土管暗渠が設置された部分や、歩道整備によって埋没してしまった部分も見られる。堀川は江戸時代以降も洪水等により、様々な改修工事が行われ、石材の形状が自然石や規格石材などの大小様々であることから、複数回に亘る改修が想定される（広瀬2018b）。

#### 4. まとめ

今回は、C区とS区について述べた。C区は、長方形の規格石材が多く使用され、2m程のものが散見できる部分と、土管暗渠周辺の50cm程度のもので積まれている部分に分かれる。さらに、規格石材が使用されている部分は3段に石材が積み、整った目地の部分も多い。S区でも同様に規格石材が見られ、1.7m程のものがよく見られるが全体的に50cm以下の石材が入り目地が乱れており、土管暗渠も多く確認できた。ここから、S区はC区より多く積み直しが行われていることがわかる。

刻印は、C区のものは比較的鮮明に残っていたが、S区では希薄であり、S12、S15区のもの確認が困難な状態となっている。

石材について奥田尚氏によれば、石垣には山科の花崗斑岩や石英斑岩を含む多種多様なものが確認されている（奥田2017）。本報告書の第4章で奥田氏により、N・C区の石材の石種やその産地、法量や加工痕についての言及がある。

N区においては穂谷付近で採石できる花崗閃緑岩、白川付近の黒雲母花崗岩、C区においては加茂付近の片麻状斑状黒雲母花崗岩、飯森山付近の花崗閃緑岩がよく使用される傾向にあり、N区とS区で使用されている石種の傾向が異なることが挙げられている。また、矢穴痕と

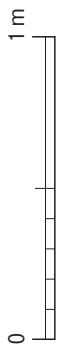


図15 二条城東側堀川石垣S区(1)





图16 二条城東側堀川石垣S区(2)

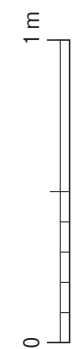
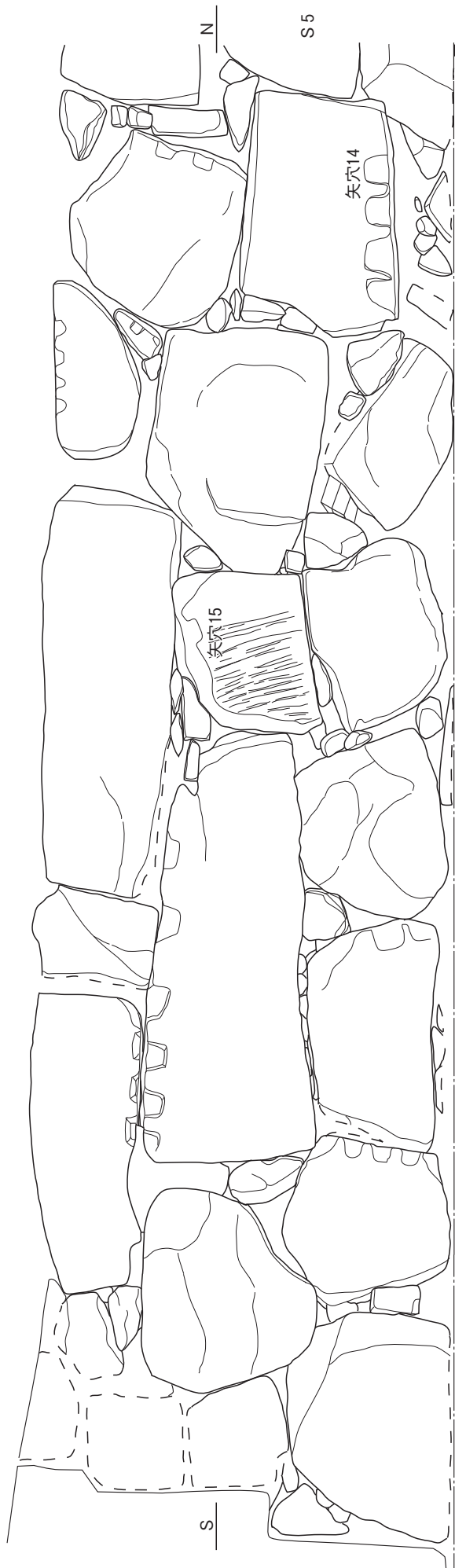


图17 二条城東側堀川石垣S区 (3)

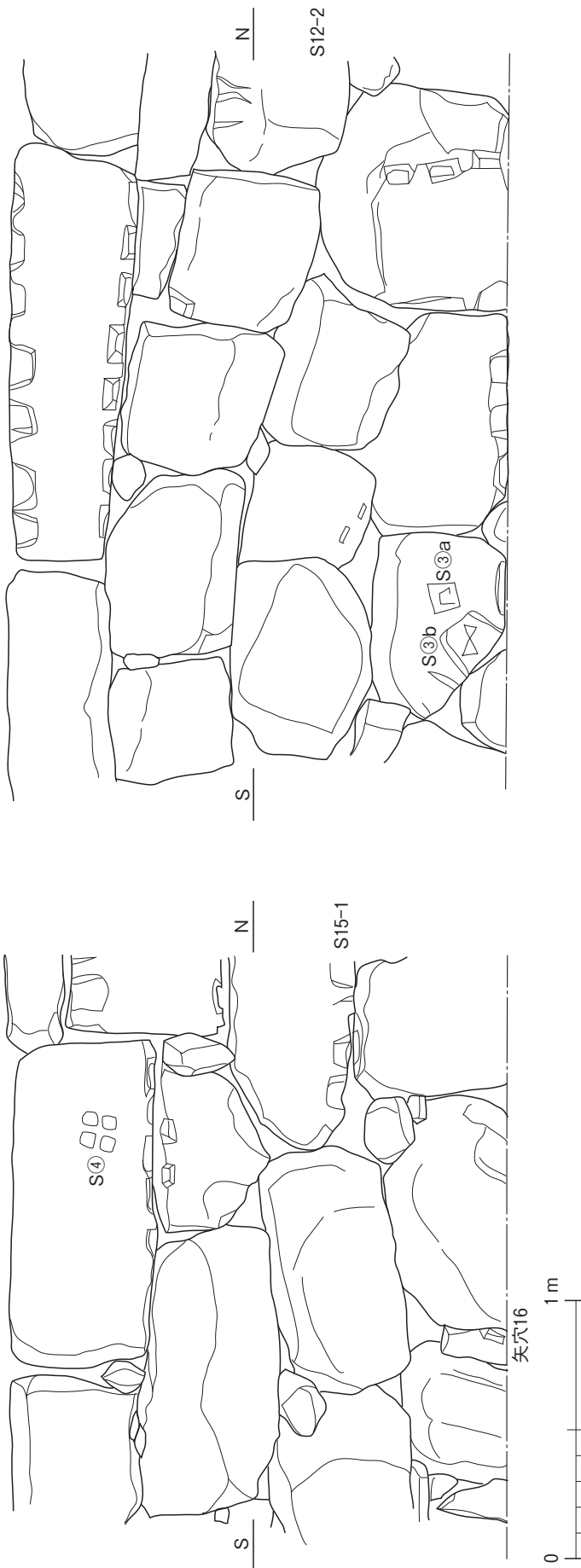


図18 二条城東側堀川石垣S区(4)

刻印から、慶長期、ついで元和～寛永期の転用石材が大半を占め、天正～文禄期と江戸時代の補修石材で構成されていると推定している。今後先に観察した石材の積み単位の目地などにより詳細に照合していく必要がある。

註

- (1) 永井太郎 2000『二条城にはふたつ天守閣あり その一 徳川家康の西堀発見』手製本に調査区の南側に「御池橋より北約十メートルの西側の石縦五二センチ、横七十センチには紀州藩普請奉行井上伝右衛門の『井』の刻印がある」とあるが、確認できなかった。
- (2) 広瀬侑紀 2018「二条城東側堀川石垣の調査(その1)」『京都橋大学歴史遺産調査報告書2017』京都橋大学文学部
- (3) 奥田 尚 2016「二条城堀川沿いの石垣材について(予報)」『京都橋大学歴史遺産調査報告書2016』京都橋大学文学部
- (4) 永井太郎氏は「御」、(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館は「北」としている。

参考文献

石崎善久 2014「二条城跡」『京都府中世城館跡調査報告書』第3冊 京都府教育委員会

大野政男編 2003「堀川」『京都の橋・河川・水路』京都市理財局財務部財務管理課

奥田 尚 2017a「二条城堀川沿いの石垣材について(予報)」『京都橋大学歴史遺産調査報告書2016』京都橋大学文学部

奥田 尚 2017b「伏見桃山城跡の石材」『京都橋大学大学院研究論集 文学研究科』第15号 京都橋大学大学院

奥田 尚 2019「二条城東側の堀川沿いの石垣材の考察」『京都橋大学歴史遺産調査報告書2018』京都橋大学文学部

垣内彩葉 2017「御香宮神社内刻印石について」『京都橋大学歴史遺産調査報告書2016』京都橋大学文学部

片平博文 2017「貞和五年(1349)における堀川および賀茂川の洪水」『京都歴史災害研究』第18号 立命館大学歴史都市防災研究所

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2010「是ヨリ北紀州」『リーフレット京都』No.153 経済雑誌社 1904『徳川實紀』第1編 経済雑誌社

建築研究協会 2011『重要文化財二条城調査工事報告書』元離宮二条城事務所

永井太郎 2000『二条城にはふたつ天守閣あり その一 徳川家康の西堀発見』大龍堂書店

永井太郎 2018『淀君の淀城ではなく徳川の淀城』宮帯出版社 p.124





写真5 堀川石垣S15-1



写真6 堀川石垣S12-2



写真7 堀川石垣S8-1



写真8 堀川石垣S5-2



写真9 堀川石垣S5-1



写真10 堀川石垣S4-2



写真11 堀川石垣S4-1、S3-2



写真12 堀川石垣S3-1



写真13 堀川石垣S2



写真14 堀川石垣S1-2



写真15 堀川石垣S1-1



中川亀蔵・永井太一郎・池部龍夫・久保 孝・青地一郎・武内良一 2017「伏見桃山陵域」への立入り調査の報告」『京都橘大学大学院研究論集 文学研究科』第15号 京都橘大学大学院

萩原良巳・畠山満則・岡田裕介 2004「京都の水辺の歴史の変遷と都市防災に関する研究」『京都大学防災研究所年報』47 京都大学防災研究所

広瀬侑紀 2018a「大塚・小山石切丁場葎ヶ谷A地区の調査（その2）」『京都橘大学歴史遺産調査報告書2017』京都橘大学文学部

広瀬侑紀 2018b「二条城東側堀川石垣の調査（その1）」『京都橘大学歴史遺産調査報告書2017』京都橘大学文学部

福家 恭・高田雄一・広瀬侑紀 2017「伏見桃山城（桃山陵墓地）および山科石切場の矢穴からみた採石技術の変遷（試案）」『京都橘大学大学院研究論集 文学研究科』第15号 京都橘大学大学院

森岡秀人 2017「木幡山伏見城跡の桃山陵墓地内観察と「豊徳」期城郭提唱の意義」『京都橘大学大学院研究論集 文学研究科』第15号 京都橘大学大学院

## 第3章

# 二条城東側堀川石垣の矢穴の形状と石垣の構造

## 1. 二条城東側堀川

二条城東側堀川の石垣は、江戸時代から現在までの度重なる改修によって、築造当時の様子を残す部分は少ないと考えられた。ところが、N区の石垣構造は、近現代の改修を含む石積みがされた範囲があるものの、直方体に加工された規格石材が石垣に利用されていることや、元和・寛永段階の矢穴が目立つことから、石垣が後水尾天皇の行幸に合わせた1624（寛永元）年からの改修に伴ったものまでさかのぼる可能性が残る部分が見られた（広瀬2018b）。

ここではN・C・Sの各地区での石垣石積みのおおよその推定時期と新旧の順番について、図19～21に4段階のグレーで示した。より薄いグレーは元和・寛永、他のグレーは江戸時代中期以降であり主に3段階とわかる。

こうした石垣改修に伴った石積みの変化について、ここでは矢穴の形状を時期の拠りとして、石垣の構造の差異からより詳しく追ってみたい。

## 2. 各地区の石垣構造と構築手法

### (1) N区の石垣構造

N区は基本的に石材を3段に積み上げて構築し、水平方向の目地が通る部分と、小形の切石で積まれた部分、土管暗渠付近の新しく積み直された部分がある。北側のN1～5区の下段には自然石や二分割された石材を主体とした石材で石垣が構築されている。その上段は、特にN2～4区に限って、30～50cm程度に加工された切石が地面に対して水平ではなく、下段の石材に合わせて積まれている。北端のN1区には江戸時代中期以降の小形の矢穴をもつ石材が見られる。

一方、南側の夷川橋付近の石垣が最も残りがよく、100cm×70cm前後の石材や130cm×50cm前後の石材を布積みした状況が見られる。矢穴は矢底の横断面形状がV字形に近い形状やコの字形のもの混在している。また、両石垣の間には2ヶ所の土管暗渠があり、その付近は石積みが乱れている。

N区には12個の刻印がある。N2～3区にはN①「平四つ目結」やN③「四角」の刻印（図19）、N4～5区

にはN⑦-b「丸」の刻印（図19）、N⑦-a「四角に菱形」の刻印（図19）、N5と8区にはN⑧・⑨「二重丸」の刻印（図19）が確認されている。刻印はそれぞれの石材調達を担当した大名家の印とされ、「平四つ目結」の刻印は本学で調査した山科大塚・小山石切丁場に見られるものと類似している（嵯峨根・垣内2015）。

### (2) C区の石垣構造

C区では、地点によって積み方に特徴があり、土管暗渠設置時を含む近現代の積み直しも含めれば、5回以上の築造が想定される。北端のC1区の石垣は、土管暗渠設置時に上部が積み直されているが、N区南端の夷川橋付近の石垣の延長にあたり、150cm×60cm前後の石材や130cm×60cm前後の石材を布積みしている。この状況はC区南端のC19～21区でも同様の積み方が確認できる。

ところが、その他の石垣の大部分は、概ね石材を3段に積み上げた構造を呈するものの、その積み方に差異が見られる。下部に積まれた部分の石垣（C3～6・10区）は、130cm×60cm前後の石材と70～90cm×60cm前後の石材を組み合わせて積み上げている。C6区の中段にある特に大きな石材にCタイプの矢穴列（第2章第3節参照）が見られる。Cタイプの呼称は森岡秀人氏等によるもので、平面正方形気味で小ぶりの特徴がある（森岡・藤川2008）。次に積まれた石垣（C2・3、7～9、13～15区）は、最上段と最下段の石材に長形状の石材の長軸を横にして、目地が通るように配置し、その間には50～70cm×50cm前後の石材を挟み込む。この中段の石材の配置にも特徴があり、C13～15区では約2.5～3.5m毎に上段の列も兼ねる大型の石材を据えている。また、C15～18区の石垣は比較的小型の石材を中心に積まれており、地面に対して水平ではないが、目地が通るように下段の石材に合わせて積み上げている。

C区の刻印には、C⑤「是ヨリ北（御）紀州」（C21区）（奥田2017：写真87）をはじめ、5個が確認できる。C4区にはC①「連結の丸」（写真19）、C5区にはC⑧「八」（奥田2017：写真81）、C10区にはC③「六または大」（奥田2017：写真82）、C12区にはC④「丸に山」（奥田2017：写真83）の刻印がある。大名家の印とされる刻印もある中で、「是ヨリ北（御）紀州」の文字刻印は担当大名家を記したものとされている（京都市2010）。しかし、これが堀川東側の石垣構築の割り当てを示すものか、採石地の標識として掘られたものかは不明である。

表1 二条城東側堀川西面石垣N区の石垣材の石種と形状

調査区	刻印番号	刻印名	刻印の法量 (縦×横cm)	石材の法量 (縦×横cm)	備考
C4	C①	連結の丸	29×16	73×132	
C5	C②	八	7×18	62×72	
C10	C③	六または大	14×15	44×96	
C12	C④	丸に山	17×17	36×73	
C21	C⑤	是ヨリ北(御)紀州	35×17	61×163	
S3	S①	十	6×8	65×80	
S8	S②	鍵形	6×8	15×165	半分地面に埋まる
S12	S③a	二重四角形	12×12	49×69	同石併刻
	S③b	分銅形	16×16		
S15	S④	平四つ目結	15×15	50×132	

### (3) S区の石垣構造

S区の石垣の大半は新しく積み直しているようである。C区との接点であるS1区は布積みしている。S3区は長方形の石材と四角形状に近い石材を組み合わせて石材を3～4段に積み上げる。他の地区は石材がうまく据えられていない石材が混じることや、目地が通らないこと、S5区の南端に土管暗渠が設置されていることなどから、近現代の改修の可能性が高いと考えられる。

S区には、5個の刻印が確認でき、S3区にはS①「十」(奥田2017:写真84)、S8区にはS②「鍵形」(奥田2017:写真85)、S12区にはS③a「分銅形」S③b「二重四角形」(奥田2017:写真86)、S15区にはS④「平四つ目結」(写真18)の刻印がある。特にS12区の刻印は1石に併刻されており、分銅形刻印は矢穴の上から彫られている。

### 3. 矢穴の形状と石垣の構造

二条城東側堀川の石垣は、「洛中洛外図」や『二条城行幸図』から二条城が築城された慶長期には存在が確認できる。江戸時代以降の様々な改修工事がなされ、何度も積み直されているようであり、石垣の積み方や石材の規格、石面の加工、矢穴の形状などは多種にわたっている。

矢穴は、いわゆる断面が浅いU字形の古Aタイプから断面逆台形コの字形のAタイプのもので大半を占め、平面正方形のCタイプのものも存在する(森岡・藤川2008)。その詳細は、昨年報告のその1(広瀬2018a)に掲載した矢穴の横断面形状を見ると、V字形に近い形状からコの字形のものまでが存在することがわかる。こ

れは矢底が明確にわかるものを抽出して作成したものであるが、山科大塚・小山石切丁場や二条城東側石垣でも同形状のものも窺える。

横断面形状については、型式変化することがわかっており、本学が調査を行った山科大塚・小山石切丁場葎ヶ谷A区の調査でも分類を試みている(広瀬2018a)。ここでこの分類に当てはめて、二条城東側堀川の矢穴を見ていくと、矢穴1・5・7が山科I型、矢穴3・9・12が山科II型、矢穴4・6・10・11が山科III型、矢穴2・8が山科V型に類似する形状となる。山科I型と山科II型は古Aタイプ、山科III型はAタイプ、山科V型はCタイプに相当する。

C区においては矢穴6～12の種類がある。大半の石材は、これらの矢穴と同形状のものである。江戸時代中期以降の山科V型である矢穴8がC6区中段に見られ、それと重なり合うC2～3区やそれらと類似した石積み構造をもつC4～15区は江戸時代中期以降の積み直しとなる。

一方、N7～C1区やC20～S1区の範囲の石垣は、慶長期段階の矢穴である山科I・II型をもつものを含むが、元和・寛永段階の矢穴である山科III型が目立つ。山科I～III型の矢穴が混じることについては、古いタイプの矢穴をもつ石材は、伏見城などに利用されていたものを持ち込んで混合された可能性が高い。むしろ山科III型の矢穴を多用する石材は、直方体に加工された規格石材であり、上記の範囲はそれを規則的に布積みしている。

つまり、二条城東側堀川の石垣の基本構造は、1624(寛永元)年からの二条城改修によるものの可能性が高い。その基本的な規格・構造を踏襲しながら、後世に何

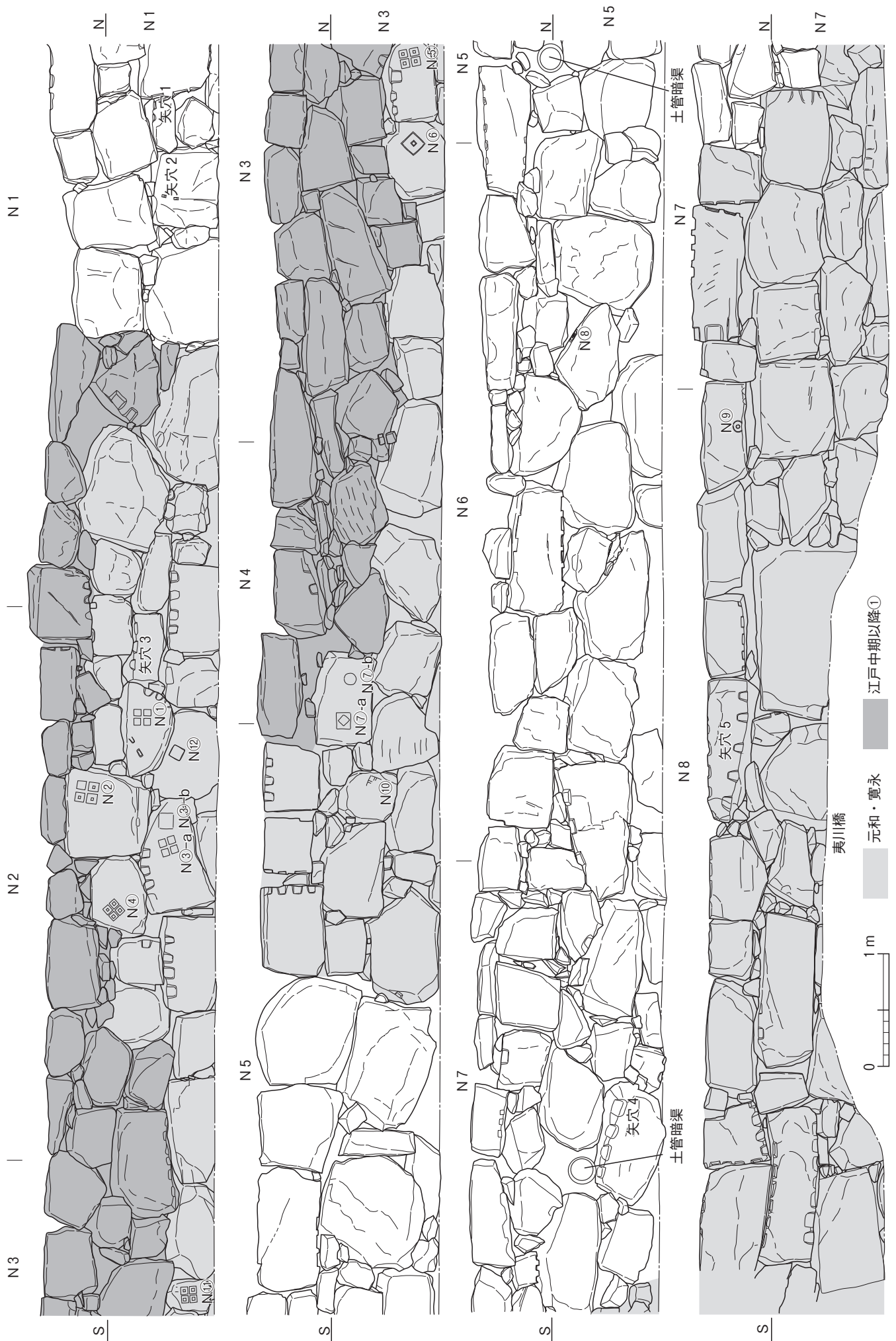


図19 N区石垣の時期区分



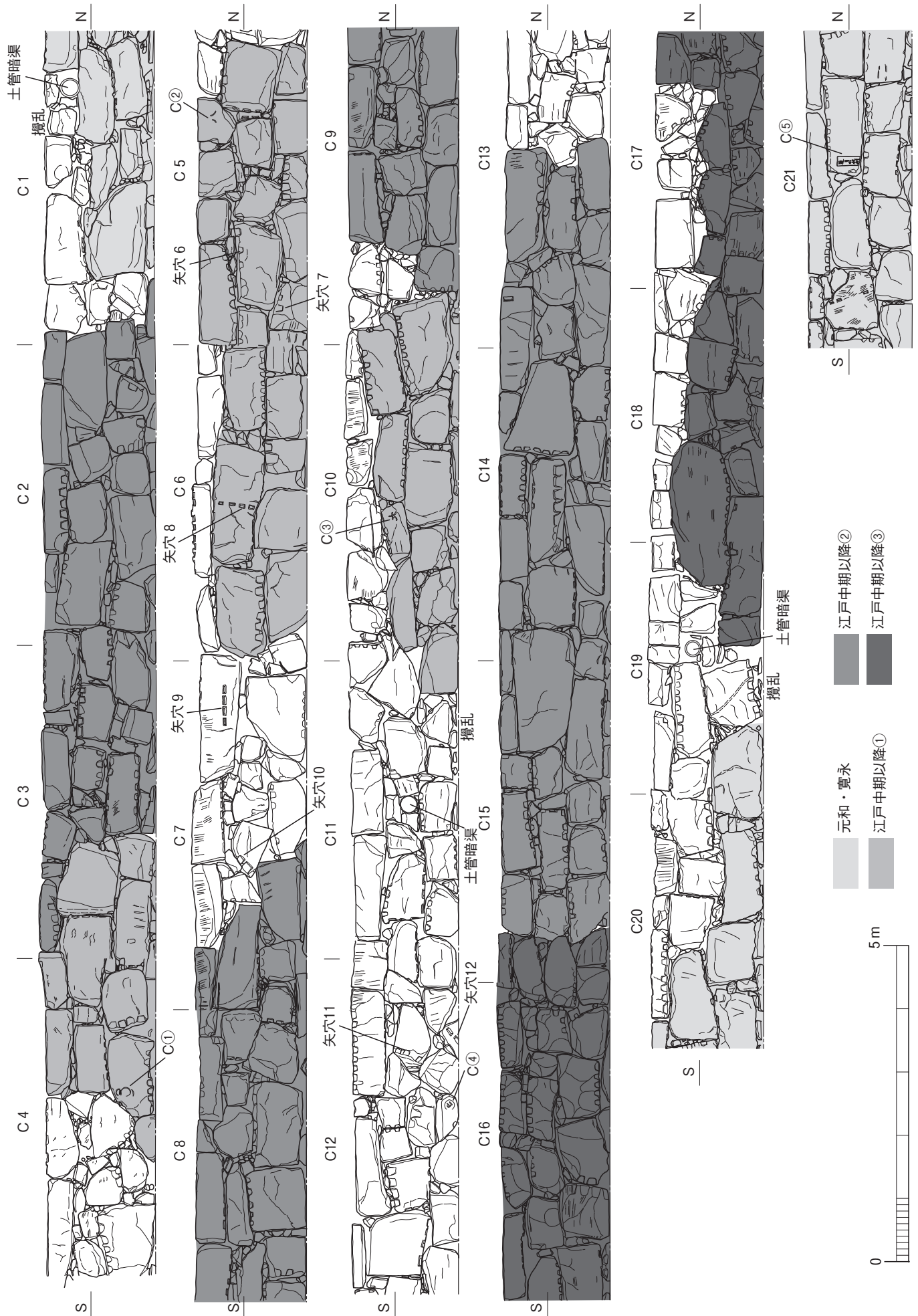


図20 C区石垣の時期区分

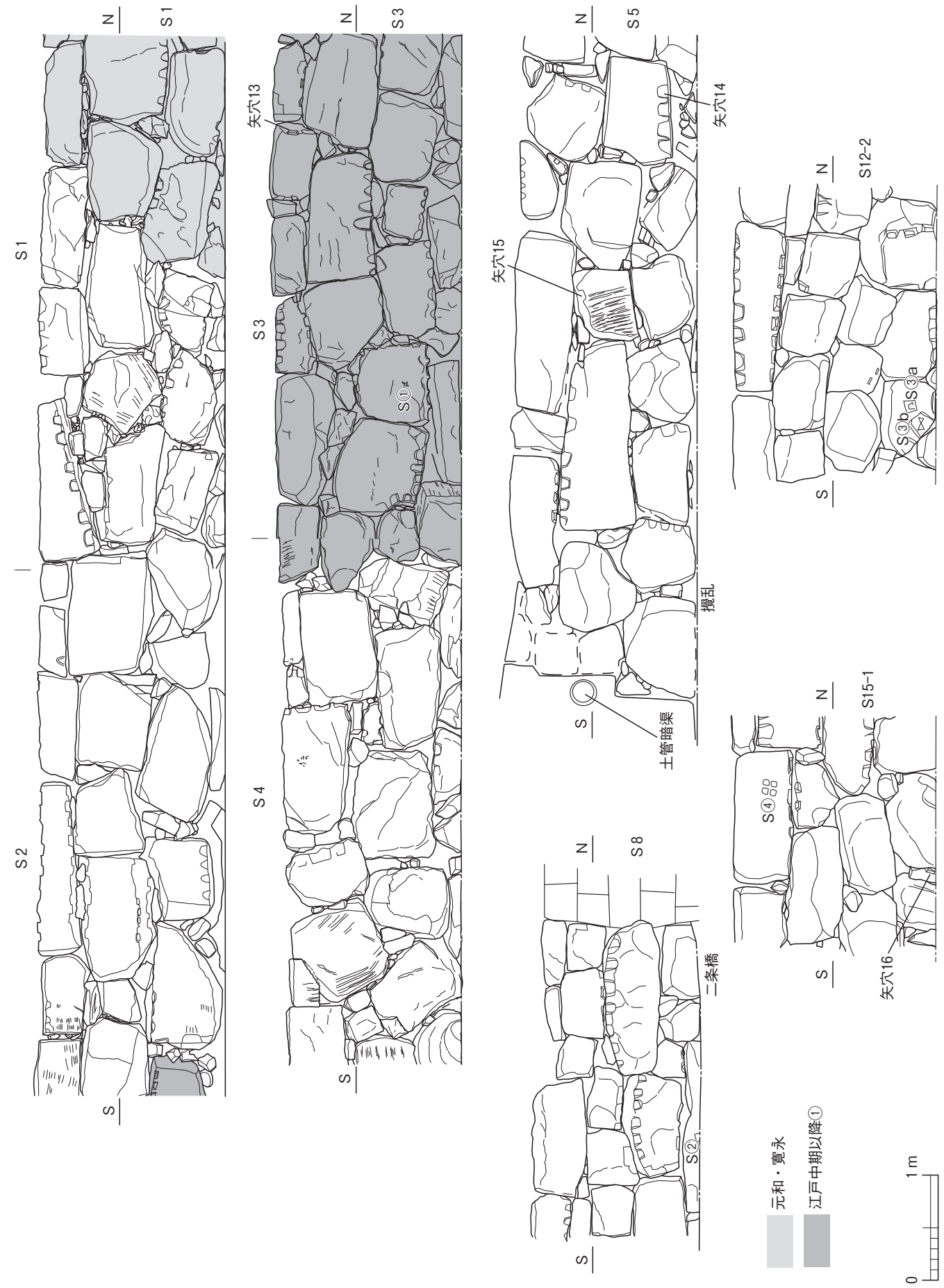


図21 S区石垣の時期区分





写真16 堀川石垣S 8-1 (S②)



写真17 堀川石垣S12-1 (S③a・b)

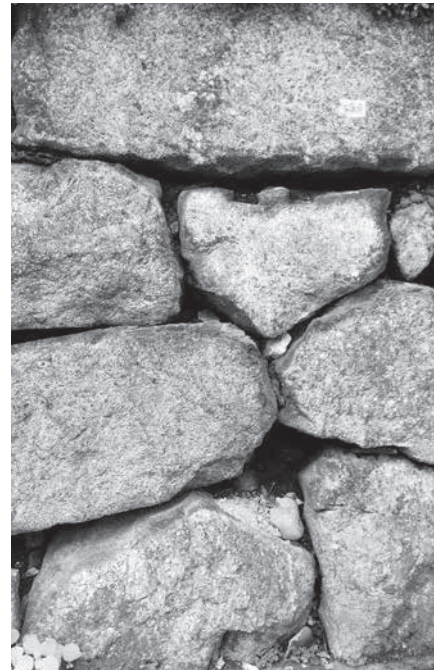


写真18 堀川石垣S15-1 (S④)



写真19 堀川石垣C 4-1 (C①)

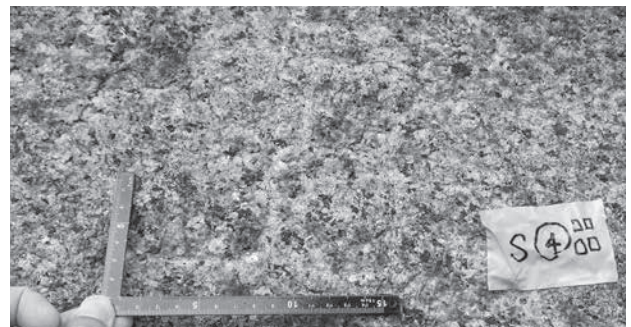


写真20 堀川石垣S 3-1 (矢穴13)

度も修復されて今日まで残されてきたと考える。

#### 4. まとめ

今回の調査により、二条城東側堀川では、少なくとも5回以上の改修が確認された。夷川橋付近N 7～C 1区やC 20～S 1区の石垣は、寛永段階の可能性が高い部分も残存することが判明した。また、その石材には古い形状の矢穴も確認することができ、慶長段階の堀川の石垣石材、あるいは伏見城の石垣石材を転用したものと考えられる。矢穴の時期については、奥田尚氏の言う、慶長期は山科Ⅰ・Ⅱ型、元和・寛永期が山科Ⅲ型にそれぞれ対応している。

また、刻印については、永井太郎氏によれば、紀伊藩の家臣井上伝衛門の「井」の字の刻印が二条橋より南にあり、また、尾張藩主義直の「八」の字の刻印が、二条橋の北にある夷川橋から南20mの石垣にありその家臣

である山崎勘兵衛の「山」の字の刻印がさらに南約5mのところにある。

このことから、「是より□紀州」の刻印は、「是より御紀州」或いは「是より御尾州」と考えるのが妥当だろうとしている（永井2018）。

刻印は石切丁場の目印などに使われることもあるため、一概には言えないが、二条城東側堀川の石垣の普請割り当ての手がかりになるだろう。

本調査を通じて、二条城東側堀川の石垣に、二次転用ではあるものの、本学の裏山にある山科大塚・小山石切丁場から切り出された石材も一定数確認できた。矢穴の形状や刻印などにも類似したものが存在し、石切丁場と城、採石地と消費地の関係の一端を考えることができた。今後、二条城などの史跡だけではなく、関連する文化遺産も含めて、後世まで保護されることを期待したい。

## 参考文献

- 石崎善久 2014「二条城跡」『京都府中世城館調査報告書』第3冊 京都府教育委員会
- 奥田 尚 2017「二条城堀川沿いの石垣材について（予報）」『京都橋大学歴史遺産調査報告2016』京都橋大学文学部
- 奥田 尚 2019「二条城東側の堀川沿いの石垣材の考察」『京都橋大学歴史遺産調査報告2018』京都橋大学文学部
- （財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2010「是ヨリ北紀州」『リーフレット京都』No.153
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2017「徳川政権の象徴～二条城～」『天下人の城』京都市文化財ブックス第31集
- 嵯峨根絵美・垣内彩那 2015「山科大塚・小山石切丁場の刻印石の踏査」『京都橋大学歴史遺産調査報告書2015』京都橋大学文学部
- 永井太一郎 2000『二条城にはふたつ天守閣あり その一 徳川家康の西堀発見』大龍堂書店
- 永井太一郎 2018『淀君の淀城ではなく徳川の淀城』宮帯出版社
- 広瀬侑紀 2018a「大塚・小山石切丁場葎ヶ谷A地区の調査（その2）」『京都橋大学歴史遺産調査報告書2017』京都橋大学文学部
- 広瀬侑紀 2018b「二条城東側堀川石垣の調査（その1）」『京都橋大学歴史遺産調査報告書2017』京都橋大学文学部
- 森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」『古代学研究』180号 古代学研究会



## 第4章

# 二条城東側の堀川沿いの石垣材の考察

### 1. はじめに

京都市の二条城東側にある堀川は、二条城の外堀にあたり、両側に石垣が積まれている。川床の左右は散策道となっており、石垣の石材を観察し易い。この西側の石垣には刻印がみられることから、諸氏により刻印の調査等はなされているが、石材の石種や石材の加工時期についての探究は殆どみられない。この石垣は長いために調査区を夷川橋、「是ヨリ御紀州」の銘が刻まれた石（図14）を境に、北（N）区、中央（C）区、南（S）区に区分し、北区と中央区の石垣材を観察した。C区の南半分については「二条城堀川沿いの石垣材について（予報）」で概要を述べた<sup>(1)</sup>。北区の調査には「二条城東側堀川石垣の調査（その1）」の図面<sup>(2)</sup>を使用している。石材の石種は裸眼観察に基づくもので、加工時期については矢穴跡の形状をもとに推定した時期である。

### 2. 石垣材の形状と石種

石垣に使用されている石材の形状と石種を裸眼で観察した<sup>(3)</sup>。北区と中央区に区分して述べる。

#### (1) 北区の石垣材

北区で観察した石材は278個である（図22・表2参照）。これら石材の石種は、片麻状斑状黒雲母花崗岩HC（加茂付近の石）が44個（16%）、片麻状花崗閃緑岩TC（当尾付近の石）が5個（2%）、片麻状斑状黒雲母花崗岩TC（当尾付近の石）が1個（四捨五入により0%をとす。以下同様である）、花崗閃緑岩IK（飯盛山付近の石）が29個（10%）、花崗閃緑岩SS（佐保付近の石）が9個（3%）、花崗閃緑岩LK（穂谷付近の石）が74個（27%）、閃緑岩LK（穂谷付近の石）が1個（-）、斑岩YC（山科付近の石）が39個（14%）、黒雲母花崗岩SC（白川付近の石）が54個（19%）、斑状黒雲母花崗岩OO（岡山付近の石）が3個（1%）、アプライト質黒雲母花崗岩Xが1個（-）、ペグマタイトXが4個（1%）、粗粒黒雲母花崗岩Xが2個（1%）、花崗斑岩Xが1個（-）、玢岩Xが1個（-）、砂岩が8個（3%）、チャートが2個（1%）である。花崗閃緑岩LKが四分の一程

を占め、近くに産する白川付近の石は5分の1ほどである。

石材のみかけの長径は、10cm以上20cm未満の石が9個（3%）、20cm以上40cm未満の石が66個（24%）、40cm以上60cm未満の石が47個（17%）、60cm以上80cm未満の石が67個（24%）、80cm以上100cm未満の石が43個（15%）、100cm以上120cm未満の石が30個（11%）、120cm以上140cm未満の石が11個（4%）、140cm以上160cm未満の石が4個（1%）、180cm以上200cm未満の石が1個（-）である。間詰に多く使用されている長径が40cm未満の石は75個と個数的になるが、観察不良等の条件で同定できていない石もある。石垣の築石を40cm以上の石材として長径をみれば、径が60cm以上80cm未満のものが67個で一番多く、径が40cm以上120cm未満のものは187個で築石の8割を占める。

#### (2) 中央区の石垣材

中央区で観察した石材は516個である（図23・表3参照）。これら石材の石種は、片麻状斑状黒雲母花崗岩HC（加茂付近の石）が231個（45%）、片麻状花崗閃緑岩HC（加茂付近の石）が6個（1%）、片麻状花崗閃緑岩TC（当尾付近の石）が4個（1%）、片麻状斑状黒雲母花崗岩TC（当尾付近の石）が11個（2%）、花崗閃緑岩IK（飯盛山付近の石）が153個（30%）、花崗閃緑岩LK（穂谷付近の石）が45個（9%）、閃緑岩LK（穂谷付近の石）が4個（1%）、斑岩YC（山科付近の石）が20個（4%）、黒雲母花崗岩SC（白川付近の石）が8個（2%）、黒雲母花崗岩MS（御影付近の石）が1個（-）、斑状黒雲母花崗岩OO（岡山付近の石）が1個（-）、アプライト質黒雲母花崗岩Xが2個（%）、ペグマタイト質黒雲母花崗岩Xが3個（1%）、ペグマタイトXが1個（-）、粗粒黒雲母花崗岩Xが1個（-）、斑岩Xが1個（-）、花崗斑岩Xが3個（1%）、玢岩Xが3個（1%）、砂岩が14個（3%）、頁岩が1個（-）、チャートが3個（1%）である。片麻状斑状黒雲母花崗岩HCが半分程を占め、近くに産する白川付近の石は僅か2%程である。

石材のみかけの長径は、10cm以上20cm未満の石が28個（5%）、20cm以上40cm未満の石が127個（25%）、40cm以上60cm未満の石が51個（10%）、60cm以上80cm未満の石が75個（15%）、80cm以上100cm未満の石が87個（17%）、100cm以上120cm未満の石が50個（10%）、120cm以上140cm未満の石が42個（8%）、140cm以上160cm未満の石が34個（6%）、160cm以上180cm未満

の石が17個（3%）、180cm以上200cm未満の石が1個（-）、200cm以上220cm未満の石が3個（1%）、240cm以上260cm未満の石が1個（-）である。長径が40cm未満の間詰に多く使用されている石は155個と個数的になるが、観察不良等の条件で同定できていない石もある。築石を40cm以上の石とすれば、径が80cm以上100cm未満の石が87個と一番多く、60cm以上120cm未満の石が212個と約6割を占める。

### （3）石種の使用傾向

間詰石は付近の川原石や築石の加工破片が使用されている場合があり、築石となる径が40cm以上の石材で使用傾向を述べる。

北区の築石203個の石種は、片麻状斑状黒雲母花崗岩HCが33個（16%）、片麻状花崗閃緑岩TCが5個（2%）、片麻状斑状黒雲母花崗岩TCが1個（-）、花崗閃緑岩IKが22個（11%）、花崗閃緑岩SSが6個（3%）、花崗閃緑岩LKが58個（29%）、閃緑岩LKが1個（-）、斑岩YCが21個（10%）、黒雲母花崗岩SCが49個（24%）、斑状黒雲母花崗岩OOが1個（-）、アプライト質黒雲母花崗岩Xが1個（-）、ペグマタイトXが3個（1%）、粗粒黒雲母花崗岩Xが1個（-）、玢岩Xが1個（-）である。

中央区の築石361個の石種は、片麻状斑状黒雲母花崗岩HCが174個（48%）、片麻状花崗閃緑岩HCが7個（2%）、片麻状斑状黒雲母花崗岩TCが8個（2%）、花崗閃緑岩IKが113個（31%）、花崗閃緑岩LKが26個（7%）、閃緑岩LKが4個（1%）、斑岩YCが12個（3%）、黒雲母花崗岩SCが7個（2%）、黒雲母花崗岩MSが1個（-）、ペグマタイト質黒雲母花崗岩Xが2個（1%）、ペグマタイトXが1個（-）、粗粒黒雲母花崗岩Xが1個（-）、斑糲岩Xが1個（-）、花崗斑岩Xが1個（-）、玢岩Xが2個（1%）、砂岩が1個（-）、チャートが1個（-）である。

石種別に石垣の築石をみれば、北区では花崗閃緑岩LKと黒雲母花崗岩SCで半分を占めるが、中央区では片麻状斑状黒雲母花崗岩HCと花崗閃緑岩IKで8割程を占める。明らかに北区と中央区では主とする石材が異なる。

## 3. 石材の採石地

石垣材の岩相をもとに石種区分すれば、前述のようである。岩相をもとに近隣地に分布する岩石との比較を行い、採石地を推定する。石垣が所在する堀川付近の川原

には砂岩・頁岩・チャートの礫は産するが、築石となるような片麻岩や花崗閃緑岩、斑岩等は遠地に行かなければ採石できない。京都市付近は丹波帯の中生層の砂岩や泥岩、チャート、玄武岩質岩などが分布する地で、比叡山から比良山にかけて黒雲母花崗岩、山科東部から大津市にかけて斑岩が分布する。淀川－木津川の左岸には領家変成岩類の片麻状花崗岩や花崗閃緑岩が分布する。二条城に近距離で同様の岩相を示す岩石が分布する地を採石地とする（図24参照）。

片麻状斑状黒雲母花崗岩HCは粗粒で、石英が赤茶色透明である。このような石は木津川市の大野から西小にかけての赤田川沿いに分布する。地域を纏めて加茂付近の石とする。大野や法華寺野では戦後も石材が採石されている。片麻状花崗閃緑岩HCは片麻状斑状黒雲母花崗岩HCの一部に部分的に含まれる石の岩相に似ている。加茂付近の石とする。片麻状斑状黒雲母花崗岩TCは片麻状構造が弱く、石英は無色透明である。木津川市の岩船寺から浄瑠璃寺にかけての付近に分布する片麻状斑状黒雲母花崗岩の岩相に似ている。当尾付近の石とする。片麻状花崗閃緑岩TCは片麻状斑状黒雲母花崗岩TCに部分的に含まれる石の岩相に似ており、当尾付近の石とする。

花崗閃緑岩IKは斑状を呈する場合もある。このような石は四條畷市の飯盛山付近に分布する花崗閃緑岩の岩相に似ている。四條畷市の権現川流域では角閃石が顕著で、北部の清滝川流域では角閃石が細かく、僅かとなる。飯盛山の山頂付近には岩体として分布する。飯盛山の北西部に分布する花崗閃緑岩を飯盛山付近の石とする。花崗閃緑岩LKは角閃石が少ない花崗閃緑岩である。枚方市の穂谷から清水谷にかけて分布する花崗閃緑岩の岩相に似ている。穂谷付近の石とする。閃緑岩LKは、中粒の閃緑岩である。穂谷の東南部に岩体として散在して分布し、穂谷川の川原石にみられる閃緑岩の岩相に似ている。穂谷付近の石とする。花崗閃緑岩SSは黒雲母が粗粒・粒状で、角閃石が顕著な花崗閃緑岩である。茨木市の佐保・大岩から豊能町にかけて分布する花崗閃緑岩の岩相に似ている。佐保付近の石とする。

斑岩YCは石英や長石の斑晶が顕著なもの、斑晶が噛み合った部分がある花崗斑岩様のものなどがある斑岩である。山科区の行者ヶ森から大津市の藤尾にかけて岩脈として分布する斑岩の岩相に似ている。山科付近の石とする。

黒雲母花崗岩SCは黒雲母が顕著な中粒黒雲母花崗岩

である。大文字の谷から鞍馬にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相に似ている。白川付近の石とする。黒雲母花崗岩MSは桃色と灰白色の長石がある山陽型花崗岩である。神戸市御影から西宮にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相に似ている。御影付近の石とする。斑状黒雲母花崗岩OOは桃色の長石が斑晶をなす山陽型花崗岩である。岡山県の前島から万成山にかけての付近に分布する斑状黒雲母花崗岩の岩相に似ている。岡山付近の石とする。

アプライト質黒雲母花崗岩X、ペグマタイト質黒雲母花崗岩X、ペグマタイトX、粗粒黒雲母花崗岩X、斑糲岩X、花崗斑岩X、玢岩Xについては産地を推定しがたい。川原石様の砂岩・頁岩・チャートは丹波帯の中生層にみられる砂岩や頁岩、チャートの岩相にそれぞれ似ている。川原石様であることから、堀川付近の河川の礫と推定される。

以上の採石推定地と堀川石垣の石材の使用傾向の関係をみれば、径が40cm以上を築石とし、観察個数が5個以上のものは、当尾含む加茂付近の石が228個、穂谷付近の石が89個、佐保付近の石が6個、飯盛山付近の石が135個、山科付近の石が33個、一番近くの白川付近の石が56個である。個数的に主を占める加茂・穂谷・飯盛山付近の石は、採石地が淀川の流域であり、水運による石材の運搬が容易な地である。

#### 4. 石種と矢穴の形状

石垣材と矢穴跡が示す時期との関係は、天正－文禄頃のもの25個、慶長頃のもの110個、元和－寛永頃のもの86個で、16世紀中頃・江戸時代中期頃・江戸時代後期頃のものそれぞれ1個ずつである。石垣材は天正－文禄頃から元和－寛永頃の時期に加工された石に集中する。石種と矢穴跡が示す時期との関係は、片麻状斑状黒雲母花崗岩HC（加茂付近の石）・花崗閃緑岩IK（飯盛山付近の石）・花崗閃緑岩LK（穂谷付近の石）・黒雲母花崗岩SC（白川付近の石）・斑岩YC（山科付近の石）が天正－文禄頃から元和－寛永頃、花崗閃緑岩SS（佐保付近の石）・閃緑岩LK（穂谷付近の石）が元和－寛永頃である。

同じ採石推定地の石が石垣の一定区間に集中しているとは認められなく、且つ、同じ石種の石でも矢穴跡が示す採石期間が長い。城の石垣築造は短期間に行われる傾向があり、堀川のような低い石垣を長期にわたって積み可能性は考えがたい。また、二条城の築造は関ヶ原の戦

い以降徳川の世となった頃とされ、天正－文禄頃に採石された石が直接運ばれているとも推定しがたい。天正－文禄頃から慶長頃に築造された石垣材を転用し、元和－寛永頃に不足石材を補充して築造されたのが初期の堀川石垣と推定される。その後、補修される毎に補充石材を加えて積み、矢穴跡が江戸時代中期や後期を示すものも混在していると推定される。

#### 5. 石種と刻印

刻印が刻まれた石が僅かにみられる。刻印の形状については「二条城東側堀川石垣の調査(その1)」を参照<sup>(2)</sup>されたい。ここでは刻印・矢穴跡の形状・石種の関係について述べる(図25参照)。刻印がある石には矢穴跡で石を割った時期が推定されるもの、割石で時期が不明のもの、自然石で時期が不明のものがある。刻印がある石は矢穴跡が示す時期が天正－文禄頃、慶長頃のもので、徳川期の大坂城石垣のような元和－寛永頃を示すものは確認されない。ただ、「是ヨリ御紀州」と刻まれた石は元和－寛永頃の矢穴跡で、石種が片麻状斑状黒雲母花崗岩HC（加茂付近の石）である。

石種と刻印の関係は、片麻状斑状黒雲母花崗岩HC（加茂付近の石）に串団子？ と二重四角、花崗閃緑岩LK（穂谷付近の石）に平四ツ目結と二重四角の平四ツ目結、花崗閃緑岩IK（飯盛山付近の石）に大・山・八・◎、斑状黒雲母花崗岩OO（岡山付近の石）に四角に菱形・○、斑岩YC（山科付近の石）に平四ツ目結の一部？、片麻状花崗閃緑岩TC（当尾付近の石）に□、黒雲母花崗岩SC（白川付近の石）に二重四角の平四ツ目結、平四ツ目結・□である。同様の刻印がみられるのは穂谷付近の石と白川付近の石、山科付近の石である。異なる刻印がみられるのは飯盛山付近の石である。これらの刻印は堀川の石垣に転用される以前の石垣に刻まれていたものの可能性がある。

刻印が徳川期の大坂城石垣の刻印と対比できるとすれば、◎が熊本の加藤家、二重四角が丹波の有馬家、山が成羽の山崎家、平四ツ目結が若狭の京極家<sup>(4)</sup>などと推定され、徳川期の大坂城築城以前の各大名の採石地についての検討ができる材料となるだろう。

#### 6. おわりに

今回観察した二条城東側の堀川の石垣材は、主として四條畷市の飯盛山付近・茨木市の佐保付近・枚方市の穂谷付近の淀川流域、木津川市の加茂付近・当尾付近の木

表2 堀川西面石垣北(N)区の石垣材の石種と形状

石種	形状	粒径 (cm)													合計		
		10~19	20~39	40~59	60~79	80~99	100~119	120~139	140~159	160~179	180~199	200~219	220~239	240~259			
H	片麻状斑状黒雲母花崗岩HC	山地		2	2	1	3	1								9	44
		割天				1		1								2	
		割慶			1	1	1		2							5	
		割元				2	1	1	1	1						6	
		割石	1	8	3	5	3		1	1						22	
G	片麻状花崗閃緑岩TC	山地				1		2							3	5	
		割石			1		1								2		
T	片麻状斑状黒雲母花崗岩TC	山地					1								1	1	
I	花崗閃緑岩IK	山地			1	3	1	4								9	29
		割天				1										1	
		割慶						1								1	
		割元					1	1								2	
		割石	1	6	3	1	3	2								16	
S	花崗閃緑岩SS	山地				1									1	9	
		割元					1								1		
		割後					1								1		
		割石	1	2	1	1				1					6		
L	花崗閃緑岩LK	山地	1	3	9	17	4	5	1			1			41	74	
		割天					1	1							2		
		割慶					1								1		
		割中				1									1		
		割石	1	11	6	5	3	2	1						29		
N	閃緑岩LK	割石				1								1	1		
Y	斑岩YC	山地	1	6	4	4	4	2							21	39	
		割慶					1								1		
		割元							1						1		
		割石		11	4	1									16		
B	黒雲母花崗岩SC	山地		2	4	8	5	3	2						24	54	
		割天				1									1		
		割慶			1	3	1	1							6		
		割元			1	1	1	1							4		
		割石		3	6	3	2	2	2	1					19		
O	斑状黒雲母花崗岩OO	割石		2			1							3	3		
A	アプライト質黒雲母花崗岩X	山地				1								1	1		
Q	ベグマタイトX	山地		1		1	1							3	4		
		割慶				1								1			
R	粗粒黒雲母花崗岩X	山地		1										1	2		
		割石				1								1			
V	花崗斑岩X	山地		1										1	1		
W	玢岩X	山地					1							1	1		
D	砂岩	川①	2	3											5	8	
		原石②	1												1		
		石③		1											1		
		割石		1											1		
C	チャート	川③		1										1	2		
		割石		1										1			
合計			9	66	47	67	43	30	11	4		1			278		

記号の英文字は図の石種記号に同じ 割=割石 矢穴の形状が天=天正・文祿頃 慶=慶長頃 元=元和・寛永頃 粒形が①=角 ②=亜角 ③=亜円



表3 堀川西面石垣中央(C)区の石垣材の石種と形状

石種	形状	粒径 (cm)												合計	
		10~19	20~39	40~59	60~79	80~99	100~119	120~139	140~159	160~179	180~199	200~219	220~239		240~259
H 片麻状斑状黒雲母花崗岩HC	山地		2	4	4	3	2	1		1				17	231
	割天		1	1	1	4	2		2					11	
	割慶			1	6	6	15	9	5	5		2		49	
	割元	1			6	8	4	8	8	4			1	40	
	割石	10	43	15	15	16	1	6	5	2		1		114	
K 片麻状花崗閃緑岩HC	割天								1					1	6
	割慶					1								1	
	割石		2	1					1					4	
G 片麻状花崗閃緑岩TC	割慶				1		1	1						3	4
	割石		1											1	
T 片麻状斑状黒雲母花崗岩TC	山地			1		1								2	11
	割天		1											1	
	割慶					1		1						2	
	割元					1	1							2	
	割石		2				2							4	
I 花崗閃緑岩IK	山地		3	6	6	7	2	1		1				26	153
	割天		1			1	2			1				5	
	割慶		2	2	11	6	2		4					27	
	割元		4		4	2	2	4	2	2				20	
	割石	9	21	12	11	12	4	4	2					75	
N 閃緑岩LK	山地				1									1	4
	割元			1										1	
	割石					1		1						2	
L 花崗閃緑岩LK	山地	3	4		2			1			1			11	45
	割慶		3	1	1	3	2							10	
	割元			1	1	1	1	1						5	
	割石	2	7	1		4	2	1	2					19	
Y 斑岩YC	山地	1		2	2	2								7	20
	割慶		1			1								2	
	割元					1								1	
	割石		6		2			1	1					10	
B 黒雲母花崗岩SC	割天						1	1						2	8
	割慶						2							2	
	割石		1	1			1		1					4	
M 黒雲母花崗岩MS	割石				1									1	1
O 斑状黒雲母花崗岩OO	割石		1											1	1
A アブライト質黒雲母花崗岩X	割石		2											2	2
P ベグマタイト質黒雲母花崗岩X	割天					1								1	3
	割石		1				1							2	
Q ベグマタイトX	割石									1				1	1
R 粗粒黒雲母花崗岩X	割石							1						1	1
U 斑礫岩X	割慶					1								1	1
V 花崗斑岩X	山地		1											1	3
	割16C		1											1	
	割石					1								1	
W 玢岩X	山地					1								1	3
	割石		2											2	
D 砂岩	川①	1	3	1										5	14
	川原石②	1	3											4	
	川原石③		1											1	
	割石		4											4	
E 頁岩	川②		1											1	1
C チャート	川②		2											2	3
	割石					1								1	
合計		28	127	51	75	87	50	42	34	17	1	3		1	516

記号の英文字は図の石種記号に同じ 割=割石 矢穴の形状が天=天正・文禄頃 慶=慶長頃 元=元和・寛永頃 粒形が①=角 ②=亜角 ③=亜円



図22 二条城東側堀川石垣北(N)区の石種と矢穴跡の時期と刻印

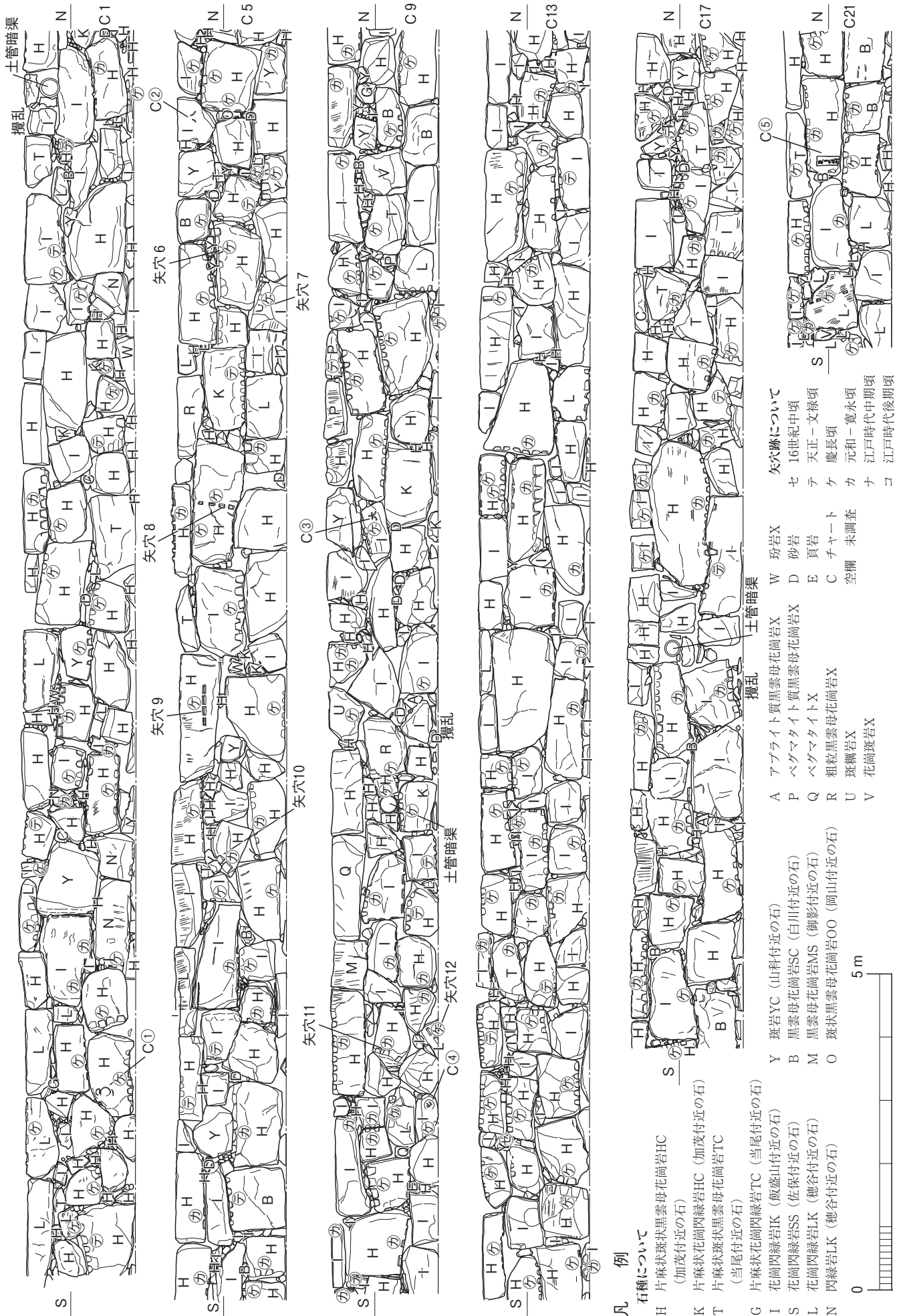


図23 二条城東側堀川石垣中央(C)区の石種と矢穴跡の時期と刻印



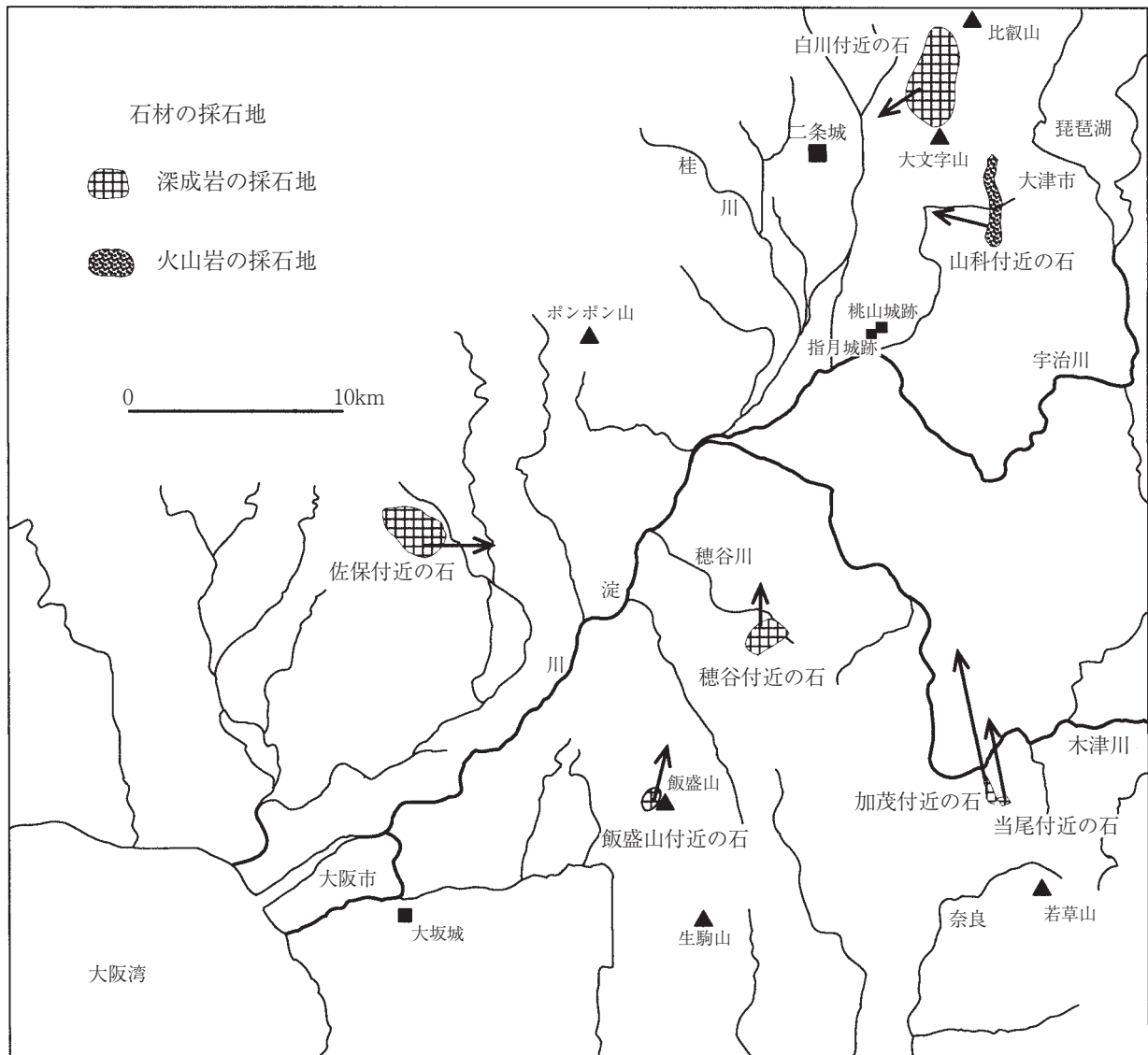


図24 石材の採石推定地

	矢穴跡が示す時期			割石	自然石
	天正 - 文禄頃	慶長頃	元和 - 寛永頃		
片麻状斑状黒雲母花崗岩HC		}	是ヨリ御紀州		□
花崗閃緑岩LK		田		田	
花崗閃緑岩IK		大山			八 ◎
斑状黒雲母花崗岩OO				田 ○	
斑岩YC					ㄣ
片麻状斑状黒雲母花崗岩TC					□
黒雲母花崗岩SC	田	田 □			田

図25 堀川石垣の刻印と石材の形状の関係



津川流域、山科区の音羽川流域、京都市の白川付近の石である。また、矢穴跡が示す時期は天正・文禄頃、慶長頃、元和・寛永頃と長い期間を示す。城の石垣は一度に石を集め、築いていくものであり、堀川の石垣は城の石垣としては築造を異にする。最終時期の元和・寛永頃の石は石切場から運び出された可能性もあるが、天正・文禄頃や慶長頃の矢穴跡がある石は転用材としか考えられない。天正－文禄頃や慶長頃に積まれた石垣材を再利用（転用）された石垣と推定される。

今回観察した範囲の石に一〇（毛利家）の刻印が観察されない。この刻印は山科東部の行者ヶ森の葎ヶ谷の斑岩YCの採石場跡や小山の白石神社の御神体（斑岩YCの自然石）上面にみられる。白石神社の御神体上面には元和・寛永頃の形状を呈する矢穴が残る。葎ヶ谷の採石場跡では平四ツ目結の刻印と共にみられ、元和・寛永頃の形状を呈する矢穴跡がある石にみられる。このような2つの刻印がある石は知恩院の山門南側の石垣材にあり、元和・寛永頃の矢穴跡がある。葎ヶ谷の採石場跡では平

四ツ目結の刻印のみの石、一〇の刻印のみの石もある。堀川石垣の斑岩YCには平四ツ目結らしきものはあるが、一〇のものを確認していない。刻印を異にする大名が同じ場所で同時に採石することは推定し難いことである。一〇の刻印がある知恩院の山門付近の石垣材は、平四ツ目結の刻印を使用する大名が放棄した採石場を一〇の刻印を使用する大名が元和－寛永頃に再開発して採石された石と推定される。

#### 註

- (1) 奥田 尚 2017「二条城堀川沿いの石垣材について（予報）」『京都橋大学歴史遺産調査報告2016』京都橋大学文学部
- (2) 広瀬侑紀・鈴木知怜 2018「二条城東側堀川石垣の調査（その1）」『京都橋大学歴史遺産調査報告2017』京都橋大学文学部
- (3) 石垣石材は付着物により観察不良で同定できないものがあつた。
- (4) 村川行弘 2002『大坂城の謎』学生社

報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく れきしいさんちょうさほうこく							
書名	京都橋大学 歴史遺産調査報告2018							
副書名	南畑古墳群、二条城堀川石垣							
シリーズ名	京都橋大学 歴史遺産調査報告							
シリーズ番号	12							
編著者名	一瀬和夫 中久保辰夫 奥田 尚 広瀬侑紀 鈴木知怜 畝麻由美							
編集機関	京都橋大学 文学部歴史遺産学科							
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL.075-571-1111							
発行年月日	2019年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみはたこふんぐん 南畑古墳群	しがけんたかしまし 滋賀県高島市 やすいかわあざみなみはた 安井川字南畑 1609番地ほか	25212	526-063	35° 35' 18"	136° 01' 26"	2018年8月27日～ 9月10日		学術調査
きゅうにじょうりきゅう 旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城)	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にじょうほりかわにしている 二条堀川西入る	26100	A453	35° 01' 46"	135° 75' 18"	2017年9月14日・ 15日・17日、 12月15日 2018 (整理)		学術調査

京都橋大学 歴史遺産調査報告 2018  
南畑古墳群、二条城堀川石垣

発行 京都橋大学 文学部  
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL075-571-1111

発行日 2019年3月31日

印刷 (有) 真陽社  
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル TEL075-351-6034

